

# 中国横断自動車道尾道松江線建設 に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（9）

## 向江田中山遺跡

2010

財団法人 広島県教育事業団



a 遺跡空中写真（北西上空から）



b 遺跡空中写真（直上から、上が北東）

## 例 言

- 1 本書は、平成18（2006）年度に実施した中国横断自動車道尾道松江線建設事業に伴う向江田中山遺跡（三次市向江田町中山所在）の発掘調査報告である。
- 2 発掘調査及び整理作業・報告書作成は、国土交通省中国地方整備局三次河川国道事務所との委託契約により財団法人広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室が実施した。
- 3 発掘調査は、岩本正二・渡邊昭人が担当した。
- 4 出土遺物の整理・復元・実測・図面の整理・写真撮影は、岩本芳幸、賃金職員の馬渡加代子・氏房見子・有原ひろみを中心となって行った。
- 5 本書は、岩本（芳）が執筆・編集した。
- 6 本書で使用した遺構の表示記号は、次のとおりである。  
SA：柱穴列，SB：竪穴住居跡・掘立柱建物跡，SD：溝状遺構，SK：土坑，SX：性格不明の遺構
- 7 土器の断面については、須恵器は黒ヌリ，そのほかは白ヌキとした。
- 8 図版の遺物番号と挿図の遺物番号は、同一である。
- 9 本書に使用した北方位は、すべて平面直角座標第Ⅲ座標系北である。
- 10 第2図は、国土交通省国土地理院発行の1：25,000の地形図（三良坂）を使用した。

## 目 次

I はじめに	(1)
II 位置と環境	(4)
III 調査の概要	(8)
IV 遺構と遺物	(12)
V まとめ	(52)

## 巻頭図版

- a 遺跡空中写真（北西上空から）
- b 遺跡空中写真（直上から、上が北東）

## 挿図目次

第1図 中国横断自動車道尾道松江線路線図	(1)
第2図 向江田中山遺跡周辺遺跡分布図 (1:25,000)	(7)
第3図 周辺地形図 (1:2,000)	(9)
第4図 遺構配置図 (1:400)	(10)
第5図 掘立柱建物跡配置図 (1:200)	(11)
第6図 SB1・SK1実測図 (1:60)	(13)
第7図 SB1カマド跡実測図 (1:30)	(14)
第8図 SB1出土遺物実測図 (1:3)	(14)
第9図 SB2・SK2実測図 (1:60)	(15)
第10図 SB2出土遺物実測図 (1:3)	(17)
第11図 SB3・SD11・SK3実測図 (1:60)	(18)
第12図 SB3出土遺物実測図 (1:3)	(20)
第13図 SB4実測図 (1:60)	(21)
第14図 SB4カマド跡実測図 (1:30)	(22)
第15図 SB4出土遺物実測図 (1:3)	(22)
第16図 SB5実測図 (1:60)	(24)
第17図 SB6実測図 (1:60)	(26)
第18図 SB7実測図 (1:60)	(27)
第19図 SB8実測図 (1:60)	(29)
第20図 SB9実測図 (1:60)	(30)

第21図	SB10実測図 (1:60) .....	(31)
第22図	SA1・SX3実測図 (1:60) .....	(32)
第23図	SD2出土遺物実測図 (1:3) .....	(33)
第24図	SD3出土遺物実測図 (1:3) .....	(34)
第25図	SD5出土遺物実測図 (1:3) .....	(35)
第26図	SD6出土遺物実測図 (1:3) .....	(36)
第27図	SD7出土遺物実測図 (1:3) .....	(37)
第28図	SK4・5実測図 (1:40) .....	(39)
第29図	SK6実測図 (1:30) .....	(40)
第30図	SK7実測図 (1:30) .....	(41)
第31図	SX3出土遺物実測図 (1:3) .....	(42)
第32図	SX4実測図 (1:40) .....	(44)
第33図	SX4出土遺物実測図 (1) (1:3) .....	(46)
第34図	SX4出土遺物実測図 (2) (1:3) .....	(47)
第35図	調査区内出土遺物実測図 (1:3) .....	(48)

## 表目次

第1表	中国横断自動車道尾道松久線建設事業に伴う報告書一覧 .....	(3)
第2表	出土土器観察表1 .....	(49)
第3表	出土土器観察表2 .....	(50)
第4表	出土土器観察表3 .....	(51)
第5表	出土土製品計測表 .....	(51)

## 図版目次

図版1	a SB1~4 竪穴住居跡全景 (西から)	図版4	a SB3 完掘全景 (西から)
	b SB1 完掘全景 (西から)		b SB4 土層断面 (南東から)
	c SB1 完掘全景 (北から)		c SB4 完掘全景 (西から)
図版2	a SB1 カマド跡 (西から)	図版5	a SB4 カマド跡 (南から)
	b SB1 中央炉跡 (東から)		b SB5~8 掘立柱建物跡 (南から)
	c SB2 土層断面 (東から)		c SB5 全景 (南から)
図版3	a SB2 完掘全景 (東から)	図版6	a SB5 全景 (西から)
	b SB3 土層断面 (南から)		b SB5-P4 土層断面 (東から)
	c SB3 完掘全景 (南から)		c SA1・SX3 全景 (南から)

- |      |   |                 |      |   |                       |
|------|---|-----------------|------|---|-----------------------|
| 図版7  | a | SA1-P1土層断面(東から) | 図版11 | a | SB10全景(南から)           |
|      | b | SB6・SA1全景(西から)  |      | b | SD6遺物出土状況(東から)        |
|      | c | SB6・SX4全景(南から)  |      | c | SK2土層断面(東から)          |
| 図版8  | a | SX4遺物出土状況(南東から) | 図版12 | a | SK3土層断面(南から)          |
|      | b | SX4完掘全景(東から)    |      | b | SK7完掘全景(東から)          |
|      | c | SX4完掘全景(南から)    |      | c | SB1調査風景(南西から)         |
| 図版9  | a | SB7全景(南から)      | 図版13 |   | 出土遺物(1)(SB1・2)        |
|      | b | SB7全景(東から)      | 図版14 |   | 出土遺物(2)(SB3・4, SD2・3) |
|      | c | SB7-P7土層断面(東から) | 図版15 |   | 出土遺物(3)(SD3・5・6)      |
| 図版10 | a | SB8全景(南から)      | 図版16 |   | 出土遺物(4)(SD6・7, SX3)   |
|      | b | SB8全景(東から)      | 図版17 |   | 出土遺物(5)(SX4)          |
|      | c | SB9全景(北から)      | 図版18 |   | 出土遺物(6)(SX4)          |
|      |   |                 | 図版19 |   | 出土遺物(7)(SX4, 調査区内)    |

## I はじめに

向江田中山遺跡の発掘調査は、中国横断自動車道尾道松江線建設事業に伴うものである。中国横断自動車道尾道松江線は、中国地方を南北に貫き、瀬戸内海側の広島県尾道市から広島県世羅町・三次市・庄原市を経て日本海側の島根県松江市に至る総延長約137kmの高速自動車国道である。このうち広島県内の路線は約86kmである。本事業は、山陽自動車・中国自動車・山陰自動車道を接続するだけでなく、西瀬戸自動車道（瀬戸内しまなみ海道）と一体になって、中四国地域連携構想の推進、経済圏・商業圏の拡大、山陽・山陰間の交流促進、広域観光ネットワークの創造を図ろうとするものである。

本事業を推進する日本道路公団中国支社（以下「道路公団」という。）は、平成12（2000）年3月、当該事業地内の文化財等の有無及び取扱いについて、広島県教育委員会（以下「県教委」という。）と協議した。県教委はこれを受けて現地踏査を行い、平成13（2001）年8月、事業地内に試掘調査が必要な箇所が存在する旨を回答した。



第1図 中国横断自動車道尾道松江線路線図（(1)～(9)は報告書番号）

その後、日本道路公団は解散し、平成 17 (2005) 年 10 月 1 日に中国横断自動車道尾道松江線建設事業は西日本高速道路株式会社に引き継がれた。県教委は平成 17 (2005) 年 10 月に当該箇所の試掘調査を実施し、向江田中山遺跡の存在を確認した旨を同月に西日本高速道路株式会社中国支社（以下「西日本高速」という。）に回答した。この遺跡の取扱いについて県教委と西日本高速は協議を重ねたが、設計変更による現状保存は不可能との結論に達した。

中国横断自動車道尾道松江線建設事業は平成 18 (2006) 年度から国土交通省の直轄事業となるため、西日本高速にかわり国土交通省中国地方整備局三次河川国道事務所（以下「国土交通省」という。）が、平成 18 年 3 月 2 日付で財団法人広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室（以下「教育事業団」という。）に向江田中山遺跡の調査依頼を行った。国土交通省と教育事業団は同年 4 月 3 日付で委託契約を結び、教育事業団は同年 4 月 17 日から 6 月 23 日までの約 2 か月間発掘調査を行った。

本報告書は、以上のような経緯のもとに行った発掘調査の成果をまとめたものであり、今後の埋蔵文化財の資料として、またこの地域の歴史の一端を知る手がかりとして、少しでも寄与できれば幸いである。

発掘調査にあたっては、国土交通省中国地方整備局三次河川国道事務所、西日本高速道路株式会社中国支社広島県事務所、三次市教育委員会及び地元の方々にご多大なご協力をいただいた。記して感謝の意を表します。

#### 第 1 図・第 1 表の報告書

- (1) 財団法人広島県教育事業団『牛の皮城跡・曾川 2 号遺跡 中国横断自動車道尾道松江線建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 (1)』 2005 年
- (2) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 (2) 曾川 1 号遺跡 (A～D 地区)』 2006 年
- (3) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 (3) 池ノ奥古墳』 2007 年
- (4) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 (4) 城根遺跡 曾川 1 号遺跡 (E 地区) 牛の皮城跡 (第 4 次)』 2008 年
- (5) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 (5) 曾川 1 号遺跡 (G～J 地区)』 2008 年
- (6) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 (6) 曾川 1 号遺跡 (K 地区)』 2008 年
- (7) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 (7) 礼場古墳・大平遺跡・後山大平古墳』 2009 年
- (8) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 (8) 北野山遺跡』 2009 年
- (9) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 (9) 向江田中山遺跡』 2010 年

第1表 中国横断自動車道尾道松江線建設事業に伴う報告書一覧

報告書	遺跡名		地区名	調査期間	所在地	時期	内容
(1)	牛の皮城跡 (北郭群)	第1次	畝状堅堀群	平成15年1月20日～ 3月14日	尾道市御調町大町字二 の丸	中世	城跡
		第2次	1～4郭	平成15年7月7日～ 10月31日			
		第3次	西堅堀	平成15年11月10日～ 11月28日			
	曾川2号遺跡			平成15年1月20日～ 3月7日	尾道市御調町大町字西 川	古代末～中世	集落跡
(2)	曾川1号遺跡	A地区	旧・平成14 年度調査区	平成14年10月21日～ 平成15年1月17日	尾道市御調町大町字曾 川	弥生時代～ 中世	集落跡
		B地区	旧・P2第一	平成15年4月7日～ 5月23日			
		C地区	旧・P2第二				
		D地区	旧・P1	平成16年1月6日～ 2月5日			
(3)	池ノ奥古墳			平成16年8月23日～ 10月28日	世羅郡世羅町字津戸字 天神	古墳時代後期	古墳
(4)	城根遺跡			平成15年1月27日～ 3月7日	尾道市御調町大町字城 根	古墳時代か	箱式石棺
	牛の皮城跡	第4次	5郭	平成18年1月30日～ 2月24日	尾道市御調町大町字二 の丸	中世	城跡
	曾川1号遺跡	E地区	旧・P4	平成15年12月1日～ 12月19日	尾道市御調町大町字米 田	縄文時代後期 ～中世	遺物包含層
(5)	曾川1号遺跡	G地区	旧・P3	平成16年6月7日～ 8月6日	尾道市御調町大町字曾 川・米田	弥生時代～ 中世	集落跡
		H地区	旧・P3側道				
		I地区	旧・P4側道	平成17年1月11日～ 3月4日			
		J地区	旧・P2				
(6)	曾川1号遺跡	K地区		平成17年4月11日～ 7月1日	尾道市御調町大町字曾 川・米田	弥生時代～ 中世	集落跡
(7)	礼場古墳			平成17年11月21日～ 平成18年1月27日	三次市後山町字礼場	古墳時代後期	古墳
	大平遺跡			平成19年6月21日～ 10月5日	三次市後山町字大平	弥生時代後期 ～古代	集落跡
	後山大平古墳			平成19年6月21日～ 10月5日	三次市後山町字大平	古墳時代後期	古墳
(8)	北野山遺跡			平成18年7月3日～ 8月4日	三次市吉舎町字敷地	平安時代	仏教関連 の施設跡
(9) 本書	向江田中山遺跡			平成18年4月17日～ 6月23日	三次市向江田町字中山	古墳時代末 ～古代	集落跡

## II 位置と環境

向江田中山遺跡は、三次市向江田町中山に所在する。三次市は広島県の北部中央に位置し、旧備後国に属していた。県北の河川の多くは三次に集まり、江の川となって島根県に流れている。三次市は、古くから陰陽を結ぶ交通の要衝として栄え、備後北部の政治・経済・文化の中心であった。そのため、古墳をはじめとする遺跡の数も多く、県内有数の遺跡密集地でもある。現在でも道路・鉄道など交通網が三次市を中心に陰陽へ放射線状に延びている。現在の三次市は、平成16(2004)年4月に旧三次市、旧双三郡(三良坂町・吉舎町・三和町・作木村・君田村・布野村)、旧甲奴郡甲奴町が合併して誕生した。面積は約778平方km、人口は約6万人である。

向江田町は三次盆地の東端にあたり、北東は庄原市と境を接する。市街地の南東約7.5kmに位置する。向江田町及びその北側の和知町は和田地区と呼ばれ、低丘陵の間に田畑が広がる農村地帯である。この和田地区は、三次市内の中でも遺跡が密集する地域でもある。近年では、中国横断自動車道尾道松江線建設事業に伴って遺跡の発掘件数が増加している。ここでは和田地区の遺跡を中心に述べていくこととする。

**旧石器時代～縄文時代** この時代の遺跡数は少ないが、三次市内では重要な遺跡が確認されている。下本谷遺跡<sup>(1)</sup>(西酒屋町)から出土した石器は、その形式と使用石材の組成から後期旧石器では最古となる可能性がある。和知白鳥遺跡(和知町)では、平成19(2007)年の第2次発掘調査により、黒曜石製のナイフ形石器、流紋岩質系の台形石器、台石・ハンマーストーン、地元産石材や水晶などの剥片・石核が出土した。下本谷遺跡の石器より新しいと考えられている。下の割遺跡<sup>(2)</sup>(和知町)からは、縄文時代晩期の土器が出土している。

**弥生時代** 弥生時代になると遺跡数は増加するが、前期の遺跡は少なく、中期以降の遺跡が多い。先述の下の割遺跡から弥生時代前期の土器が出土している。塩町遺跡<sup>(3)</sup>(大田幸町)では、中～後期の集落跡が確認されている。出土した塩町式土器は、広島県備後北部の弥生時代中期後半の指標土器となっている。史跡陣山遺跡<sup>(4)</sup>(向江田町)は、貼石・列石を伴う四隅突出形墳丘墓が5基連なり、塩町式土器が供献されていた。

**古墳時代** 古墳時代になると、遺跡数は飛躍的に増大する。その大部分は古墳である。三次市内ではこれまで4世紀代の古墳は確認されていなかったが、近年4世紀末に遡る可能性がある古墳も発掘されている。本遺跡周辺にも多くの古墳群が存在する。下山手古墳群<sup>(5)</sup>(向江田町)は、7基からなる古墳群で、4号古墳は5世紀前半から中葉の円墳、5号古墳は4世紀末から5世紀初頭の長方形墳で、両古墳は隣接している。宮の本古墳群(向江田町)は、30基以上からなる古墳群で、平成19(2007)年に9基の発掘調査を実施した。第24号古墳は、4世紀末～5世紀初頭頃の築造と考えられる径約30m、高さ約4mの円墳である。墳丘斜面に葺石が施され、平坦面に90本以上の円筒埴輪列がみられた。墳頂部には長さ約3.5mの竪穴式石室を中心にその両隣に2基の箱式石棺が築かれていた。その南側にある第20・31・32号古墳は6世紀末～7世紀前半頃の築造と考えられ、第20・31号古墳の埋葬施設は横穴式石室、第32号古墳は箱式石棺である。権

現古墳群（向江田町）は8基からなる古墳群で、平成18（2006）年に第1～3号古墳の発掘調査を実施した。いずれも5世紀頃の古墳である。第2号古墳は直径約20m、高さ約3mの円墳で、埋葬施設は5基の箱式石棺である。石室内から鉄鏝や玉類が出土している。上大縄古墳<sup>(6)</sup>（和知町）は、5世紀後半頃に築造された円丘部の両側に造出部がある全長約26mの古墳で、埋葬施設は竪穴式石室である。瀬戸越南古墳（向江田町）は、平成19（2007）年に発掘調査を実施した5世紀後半から6世紀頃の古墳である。径12～13mの円墳で、墳丘に葺石を施し、一部は二段築成となっている。埋葬施設は箱式石棺である。箱山古墳群（向江田町）は、9基からなる古墳群で、平成18（2006）年に第3～6号古墳の発掘調査を実施した。第5・6号古墳は5世紀代の方墳である。5号古墳は13.7m×14m、高さ2.5mで、全面に葺石があり、二段築成になっている。埋葬施設は箱式石棺2基で、いずれも礫床に粘土枕がある。第3号古墳は6世紀末～7世紀前半の円墳、第4号古墳は5世紀代の円墳である。

深茅遺跡（和知町）では、古墳時代の竪穴住居跡が確認されている。河原田2号遺跡<sup>(7)</sup>（和知町）では、6世紀後半の竪穴住居跡8軒が検出されている。先述の和知白鳥遺跡では、平成18（2006）年の第1次発掘調査により、5～6世紀の竪穴住居跡49軒、掘立柱建物跡3棟の他、横穴式石室を埋葬施設とする古墳3基を検出している。谷を挟んだ東側の丘陵上に上四拾貫古墳群<sup>(8)</sup>が立地し、この古墳群の被葬者が居住した集落跡と考えられている。

古代 古代の遺跡数はそれほど多くないが、向江田町周辺で注目される遺跡も確認されている。三次市は近世までの三谷郡と三次郡からなるが、三谷郡には『和名抄』によると、平安時代初め三谷・松部（私部の誤記と考えられる）・江田・額田・刑部の5つの郷があったとされる。向江田町は三谷郡北西部にあたり、江田郷の一部と考えられている。

史跡寺町廃寺跡<sup>(9)</sup>（向江田町）は、『日本霊異記』に記載されている三谷寺に比定されている。法起寺式伽藍配置で、水切り瓦と呼ばれる特徴ある軒丸瓦が出土している。三谷郡の郡寺跡と考えられている。寺町廃寺跡の南西約1.2kmに位置する上山手廃寺跡<sup>(10)</sup>（向江田町）は、7世紀後半に寺町廃寺跡と同じ規格で造られ、水切り瓦が出土している。塔跡が確認されておらず、尼寺の可能性が指摘されている。大当瓦窯跡<sup>(11)</sup>（和知町）は、寺町廃寺跡の瓦を焼成した窯跡である。

馬洗川を挟んで向江田町の南にある幸利遺跡<sup>(12)</sup>（志幸町）は、『幸利』の地名や布目瓦の出土などから三谷郡衙跡推定地とされる。若見迫遺跡（三良坂町岡田）は、平成19（2007）年の発掘調査で、平安時代前期（9世紀）の土坑や柱穴群などを検出した。鉛のインゴットや瓦が出土しており、一般的な集落ではなく、約1km西に幸利遺跡があることから三谷郡衙跡推定地との関連性が考えられる。先述の下本谷遺跡では、奈良時代後半から平安時代初頭の掘立柱建物跡12棟、欄跡5条などが検出されている。欄に囲まれた建物跡はコの字形に配置され、中央には広場を有する。緑釉陶器や硯なども出土しており、三次郡衙跡と推定されている。

中世 鎌倉幕府御家人の広沢氏は、建久3（1192）年、三谷郡12郷の地頭職に任命され、武藏国から入部し、和知に居住するようになった。その後、13世紀後半に広沢氏は和智・江田の両氏に分かれた。和智氏は和知及び三谷郡東部を、江田氏は向江田町から南の三若町にかけて領有した

が、和智氏は、その後吉舎へ本拠を移した。江田氏は当初は向江田町を本拠とし、のち三若町へ本拠を移したとされる。和田地区周辺でも多くの城跡や古墓等が確認されている。茶臼山城跡<sup>(13)</sup>(向江田町)は、標高312m、比高約140mの山上に築かれた城跡である。東西の遺構群からなり、東は約100m×50m、西は270m×130mの規模で、土塁や横堀が残る。国広山城跡<sup>(14)</sup>(和知町)は、標高340m、比高約140mの国広山から南の龍王山に至る尾根及び支尾根に広がる南北約800m、東西約600mの大規模な山城である。5つの城跡群からなり、それぞれ城跡の名がつけられているが、一連の城である。山崎遺跡<sup>(15)</sup>(大田幸町)からは、土坑から和鏡・古銭・土師質土器とともに呪符と考えられる円札2枚が出土しており、中世の呪術資料として県重要文化財に指定されている。

## 註

- (1) 下本谷遺跡発掘調査団「下本谷遺跡-推定備後国三次郡衛跡の発掘調査報告-」1975年  
広島県教育委員会「下本谷遺跡第1～4次発掘調査概報」1980～1983年  
広島県立埋蔵文化財センター「下本谷遺跡第5・6次発掘調査概報」1984・1985年  
三次旧石器文化研究会「下本谷遺跡の基礎的研究-三次西酒屋給水池建設に伴う旧石器時代遺跡の調査から-」2007年
- (2) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「上大槻古墳・下の制遺跡」1989年
- (3) 広島県双三郡・三次市史料総覧編集委員会「広島県双三郡・三次市史料総覧」第五編 1974年
- (4) 三次市教育委員会『碑山遺跡』1996年
- (5) 三次市教育委員会「下山手第4・5号古墳」1994年
- (6) 註(2)に同じ
- (7) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「河原田2号遺跡・寺の前古墓」1992年
- (8) 広島県教育委員会「中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(1)」1978年
- (9) 三次市教育委員会「備後寺町廃寺-推定三谷寺跡第1～3次発掘調査概報-」1980～1982年
- (10) 広島県教育委員会「上山手廃寺跡発掘調査概報(1)(2)」1979・1980年
- (11) 三次市教育委員会「備後寺町廃寺-推定三谷寺跡第3・4次発掘調査概報-」1982・1983年
- (12) 金田章裕「律令期における郡と郷」「過疎化の進む内陸盆地と河谷地域-三次盆地と江川流域の過去と現在-」大明堂 1973年
- (13) 広島県教育委員会「広島県中世館遺跡総合調査報告書」第4集 1996年
- (14) 註(8)と同じ
- (15) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「山崎遺跡」1994年

## 参考文献

- ・平凡社『日本歴史地名大系第35巻 広島県の地名』1982年
- ・角川書店『角川日本地名大辞典34 広島県』1987年
- ・広島県教育委員会「広島県遺跡地図Ⅱ(三次市・庄原市)」2006年



- 1 向江田中山道跡 2 深茅遺跡 3 上陣古墳群 4 高保古墳群 5 大仙大平山古墳群 6 鳥越古墳群 7 陣山城跡  
 8 陣山墳墓群 9 陣山古墳群 10 日野目古墳群 11 押江山古墳群 12 椎現南古墳群 13 椎現古墳群  
 14 鳥井山古墳群 15 円納古墳群 16 和知大久保古墳群 17 堂の奥古墳群 18 南山城跡 19 歳政古墳群  
 20 和知白鳥遺跡 21 上四拾貫古墳群 22 四拾貫日南古墳群 23 国広山城跡 24 下の割遺跡 25 弁天古墳群  
 26 弁天東古墳群 27 笛吹古墳群 28 大当瓦窯跡 29 大鳴北古墳群 30 上大縄古墳 31 大鳴古墳群  
 32 河原田2号遺跡 33 瀬戸越北古墳群 34 瀬戸越中古墳群 35 瀬戸越古墳群 36 瀬戸越南古墳  
 37 茶白山城跡 38 河原田古墳群 39 箱山古墳群 40 野桶北古墳群 41 野桶南古墳群 42 砂走古墳群  
 43 寺町庵寺跡 44 下山手古墳群 45 天神古墳群 46 上山手庵寺跡 47 岡ノ段古墳群 48 宮の本古墳群  
 49 宮の本遺跡 50 小五郎古墳群 51 桶平古墳群 52 大番谷古墳群 53 高杉城跡 54 淨樂寺古墳群  
 55 勇免古墳群 56 萱草古墳群 57 塩町遺跡 58 新宮山城跡 59 幸利山古墳 60 若見迫遺跡

第2図 向江田中山道跡周辺遺跡分布図 (1:25,000)

### Ⅲ 調査の概要

向江田中山遺跡が所在する三次市向江田町は、南側を馬洗川が南東から北西に向けて流れ、中央部を馬洗川支流国兼川が流れている。国兼川は向江田町西部において馬洗川に合流する。遺跡は、標高 281 m の山塊から北東に向かって延びる丘陵尾根部に位置する。尾根上には平坦部が存在し、尾根は途中で北と東の 2 方向に分かれている。遺跡は尾根が 2 方向に分かれる部分を中心に形成されている。遺跡の北側には国兼川支流菅田川沿いに形成された細長い水田地帯が広がっており、遺跡からその水田地帯の一部見ることができる。調査区は標高 199 ~ 204 m で、周囲の水田との比高は約 25 m である。遺跡のうち掘削工事が及ぶ長さ 53 ~ 84 m、幅 22 ~ 25 m の細長い範囲の発掘調査を実施した。調査面積は 1,450 m<sup>2</sup> で、遺跡の現状は山林であった。

発掘調査は、試掘調査の状況を基に、重機を使用して表土の除去作業を行った。その後、人力による遺構検出作業と遺構の掘り下げを行った。表土（暗褐色土）の下に黒褐色土があり、その下の褐色土が遺構面である。

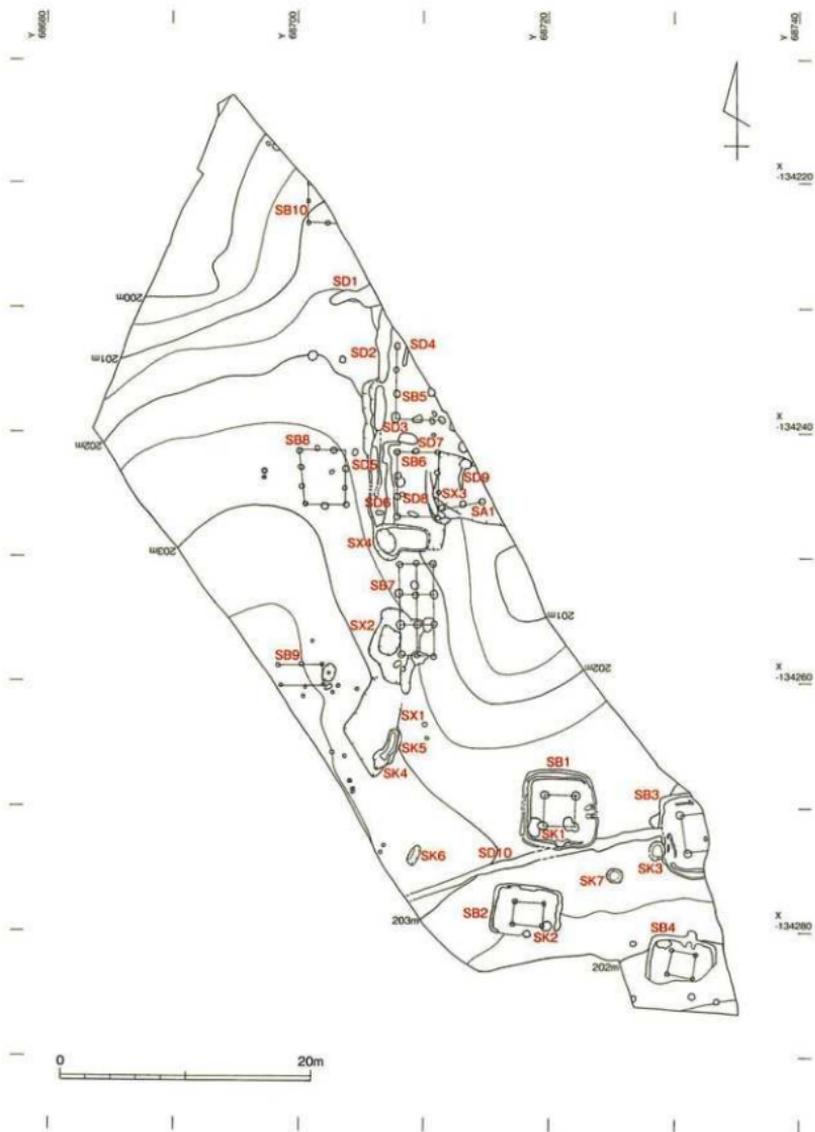
検出した主な遺構は、竪穴住居跡 4 軒（SB 1 ~ 4）、掘立柱建物跡 6 棟（SB 5 ~ 10）、柱穴列 1 列（SA 1）、溝状遺構 11 条（SD 1 ~ 11）、土坑 7 基（SK 1 ~ 7）、ピット、性格不明の遺構 4 基（SX 1 ~ 4）などである。竪穴住居跡と掘立柱建物跡は混在せず、小さな谷を挟んで調査区南側（東側尾根）に竪穴住居跡、調査区中央から北側（北側尾根）にかけて掘立柱建物跡が建てられていた。また、掘立柱建物跡の多くが主軸を揃え、計画的に配置されていることが判明した。

出土遺物は、須恵器・土師器、砥石などがあり、竪穴住居跡、掘立柱建物跡に伴う溝状遺構、SX 4 を中心に遺物は出土している。なかでも炊飯具である土師器甕・甔が多く、特に SX 4 から多量に出土した。また、少量であるが暗文土師器や手づくね土器も出土した。

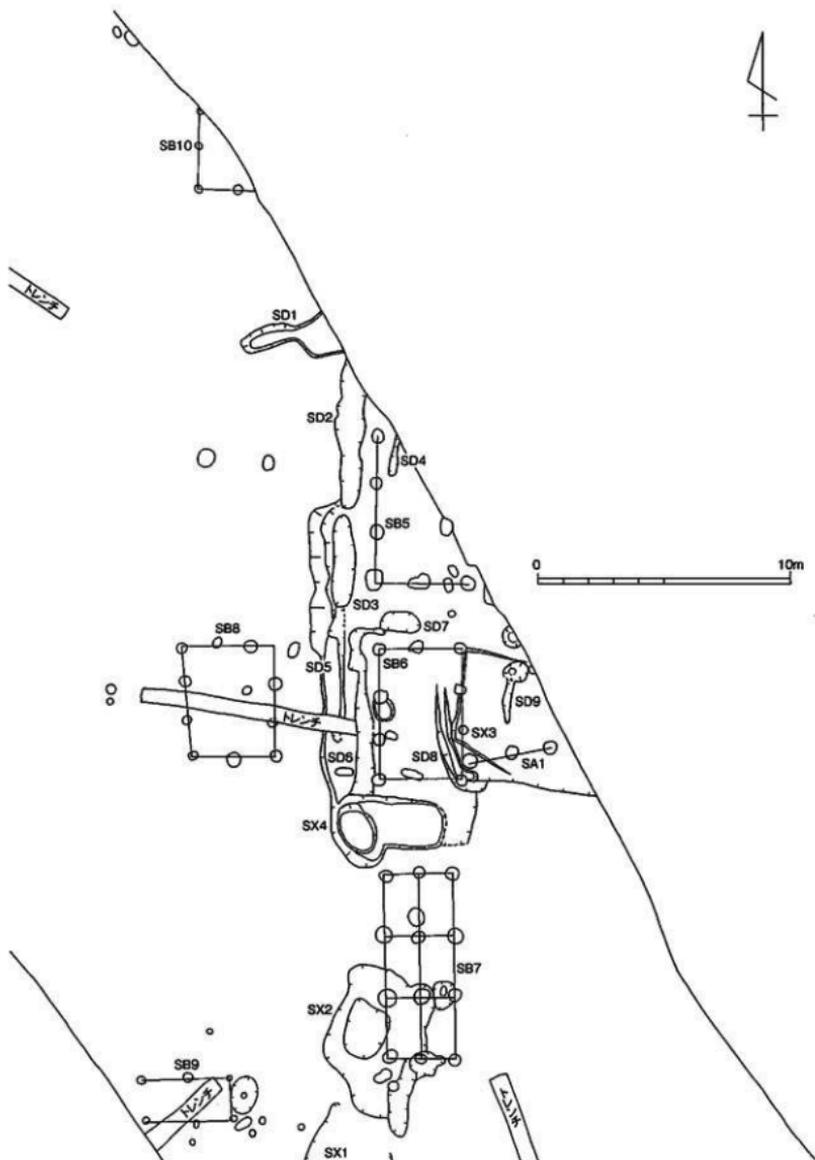
遺構の時期は、出土遺物から SD 10 を除いて、いずれも古墳時代末から古代（6 世紀末から 7 世紀中頃）と考えられる。SD 10 は、現代に近い比較的新しい時期の溝である。



第3圖 周辺地形図 (1:2,000) (7ミ目は調査区)



第4図 遺構配置図 (1:400)



第5図 掘立柱建物跡配置図 (1:200)

## IV 遺構と遺物

### 1 竪穴住居跡

#### (1) SB1・SK1

検出遺構（第6・7図、図版1-b・c、2-a・b）

SB1は、調査区南部に位置する竪穴住居跡である。3.2m南側にはSB2、4.8m東側にはSB3がある。SB1の平面形態は方形で、建て替えが行われ、SB1a（古）→SB1b（新）の新旧2時期がある。SB1aは一辺5.55m四方であるが、SB1bは東西方向6.0m、南北方向6.45mの規模に拡張している。東壁は共有しており、東西方向は西側へ45cm程度、南北方向は北側へ55cm、南側へ35cm拡張を行っている。建物はP1～P4を柱穴とする4本柱で、拡張後も元の柱穴を使用している。中央南東寄りに炉跡、東側壁際に造り付けのカマド跡がある。床面は黄色土で貼床をしている。住居跡覆土は淡黒褐色土の単一層である。

壁高は最も残りの良い東壁南部において18cmで、ほかの部分は10cm以下のところが多い。SB1aの壁溝は東壁と南壁東部を除いて廻っているが、南西側で1か所途切れている。壁溝の上端幅11～32cm、深さは最大で9cmである。SB1bの壁溝は北壁と西壁で確認され、上端幅14～38cm、深さは最大で7cmである。

柱間距離は、東西方向のP1～P2間が2.45m、P3～P4間が2.5m、南北方向のP1～P3間が2.5m、P2～P4間が2.45mで、平均2.48mである。P4の西端は炉跡と重複しており、炉跡がP4を掘り込んでいる。柱穴は長円形のものが多い。各柱穴の規模は、P1が長径66cm×短径61cm、深さ52cm、P2が長径76cm×短径66cm、深さ52cm、P3が長径85cm×短径57cm、深さ49cm、P4が長径66cm×短径約60cm、深さ54cmである。P1及びP4は径19～22cmの円形の柱痕跡が残る。

炉跡の平面形は隅丸の長方形で、南東部はP4と重複しているが、同時存在したものである。長辺100cm、短辺68cm、深さ8～14cmで、中央部が深くなっている。3層からなる覆土は炭化物を多く含み、壁面上部が被熱により赤変している。

カマド跡は、地山を削り残した上に暗褐色土及び黄褐色土を積み重ねて袖部を形成している。北側の袖部は長さ100cm、幅36cm、高さ14cm、南側の袖部は長さ90cm、幅31cm、高さ18cmが残存している。燃焼部は幅40～55cm、長さ65cmの長方形である。焚口が狭くなるよう両袖部を湾曲させており、焚口の幅は25cmである。上部は失われており、煙道も残存していない。燃焼部手前から焚口にかけて焼土が堆積している。また、カマド跡の30cm北西にも焼土を多く含む範囲が認められるが、これはカマドから掻き出されたものであろう。

南側中央壁溝部分で、径60cm、短径52cm、深さ20cmの長円形のピットを検出した。貼床を除去した際にピットの形が明確になったことから、SB1aに伴うものと推察される。さらに、床面南西隅の貼床下からSK1を検出した。長円形の土坑で、東端はP3と重複しており、P3に掘り込まれている。長径174cm×短径約110cm、深さ23cmで、中央部が深くなっている。覆土は



2層堆積している。

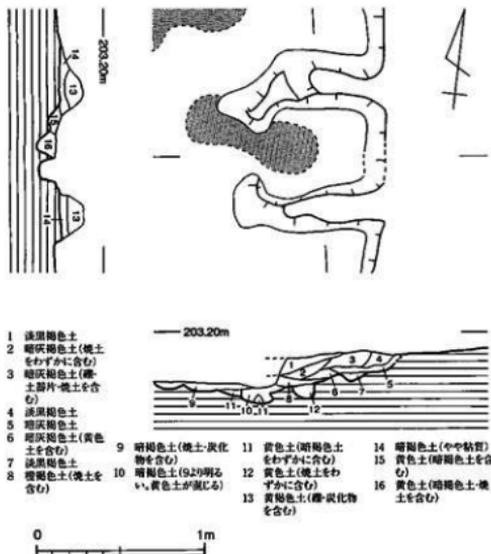
### 出土遺物（第8図、図版13）

須恵器杯蓋・杯身、土師器甕が出土した。

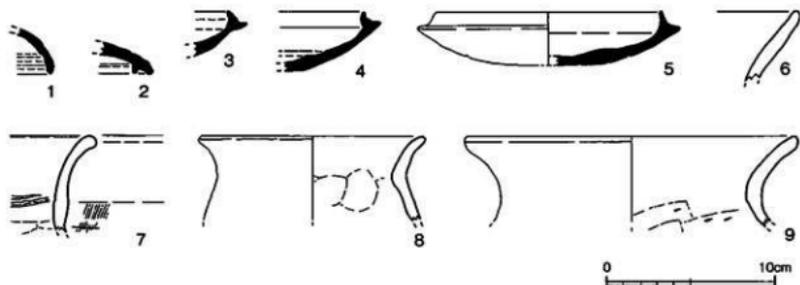
1・2は須恵器杯蓋である。1は貼床下から出土したかえりのない形態である。天井部から口縁部にかけてのカーブは比較的急である。内外面とも回転ナデである。2は覆土上層から出土したかえりのある形態である。口縁部しか残存していないため、つまみの有無は不明である。かえりと口縁端部がほぼ同じ高さである。天井部のかなり下方まで回転ヘラケズリを行い、その他は回転ナデである。

3～5は須恵器杯身である。3・4は床面から出土した。ともにたちあがり部が短く立ち上がり、受部は短く水平に伸びる。内外面とも回転ナデである。5は壁溝から出土した。底部は緩やかにカーブしているが、全体的に扁平気味である。たちあがり部は内湾気味に立ち上がり、受部は外側に伸びている。底部外面は回転ヘラケズリで、それ以外は回転ナデである。復元口径は13.3cm、復元器高は3.2cmである。

6～9は床面から出土した土師器甕である。6は比較的口頸部が長く、外反しながら立ち上がるが、口縁部付近でやや内湾気味になる。全体にヨコナデを施す。7は口頸部が長く、緩やかに外反しながら立ち上がり、口縁部付近でカーブを強める。端部は丸くおさめ、わずかに玉縁状に



第7図 SB1カマド跡実測図(1:30)(アミ目は焼土範囲)



第8図 SB1出土遺物実測図(1:3)

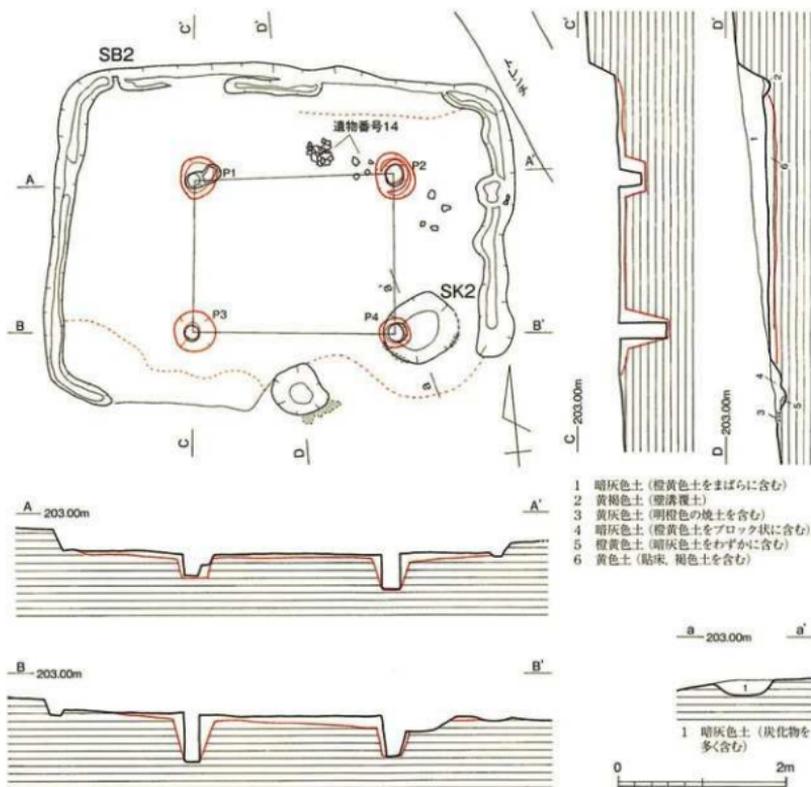
なっている。口頸部はヨコナデで、胴部内面はヘラケズリ、外面はハケ目である。8は復元口径13.1cmの小型甕である。頸部で屈曲し、口縁部は緩やかに外反する。口頸部はヨコナデで、胴部内面上部に指頭圧痕が見られるが、胴部外面は摩滅のため調整は不明である。9は復元口径19.4cmである。口縁部は緩やかに外反する。口頸部はヨコナデ、胴部内面はヘラケズリである。

その他、床面から須恵器高杯脚部片が出土し、SB2覆土下層出土の破片と接合したが、細片のため図示できなかった。床面から鉄滓も微量(4.3g)出土している。

なお、SK1から遺物は出土していない。

## (2) SB2・SK2

検出遺構(第9図, 図版2-c, 3-a, 11-c)



第9図 SB2・SK2実測図(1:60)(アミ目は焼土, 赤破線は粘床範囲)

S B 2は調査区南端に位置する竪穴住居跡である。S B 1の3.2 m南側にあり、7.2 m東側にはS B 4がある。平面形態は方形であるが、南側は斜面になっているため南端が流失している。規模は、東西方向が5.55 m、南北方向は現状で4.0 mである。西辺の南北方向の壁溝が南端で東西方向に曲がりながら終わっているため、床面は南側にはそれほど掘がらないものと思われる。したがって、平面形は正方形ではなく、南北方向が短い長方形になるものと推定される。覆土は暗灰色土の単一層である。建物はP 1～P 4を柱穴とする4本柱で、床面は黄色土で貼床をしている。貼床上では柱の痕跡のみ確認することができ、貼床を除去した段階で柱穴を確認することができた。カマド跡は検出されなかった。

壁高は最も残りの良い北西隅部において33 cmである。壁溝は流失している南壁を除いて廻っているが、北壁で2か所途切れている。壁溝の上端幅19～41 cm、深さは最大で10 cmである。

柱間距離は、東西方向のP 1～P 2間が2.38 m、P 3～P 4間が2.42 m、南北方向のP 1～P 3間が1.82 m、P 2～P 4間が1.90 mである。東西方向の平均2.40 m、南北方向の平均1.86 mで、南北方向が短い。柱穴は円形または長円形で、埋土はやや暗い黄色土である。P 4はS K 2と重複しており、S K 2に掘り込まれている。各柱穴の規模は、P 1が長径53 cm×短径43 cm、深さ29 cm、P 2が長径56 cm×短径44 cm、深さ43 cm、P 3が長径49 cm、深さ58 cm、P 4が長径37 cm×短径34 cm、深さ49 cmである。すべての柱穴に径18～22 cmの円形の柱痕跡が残る。

中央南端に長径67 cm×短径57 cm、深さ16 cmの浅いピットがある。覆土に焼土を含み、肩部は熱を受け、一部赤変している。木の根による攪乱を受け、不明確な部分もあるが、炉跡の可能性がある。

床面南東隅にS K 2がある。長円形の土坑で、西端はP 4と重複している。貼床上面で検出しており、P 4より新しい。長径92 cm×短径約75 cm、深さ19 cmで、底面は中央が深くなり、全体は摺鉢状を呈している。肩部は熱を受け、一部赤変している。覆土は暗灰色土の単一層で、炭化物を多く含む。

#### 出土遺物（第10図、図版13）

遺物は覆土下層、北東部床面を中心に、須恵器杯蓋・杯身、土師器高杯・甕、砥石が出土した。

10・11は須恵器杯蓋である。10は覆土上層及び下層から、11は覆土下層から出土した。ともに天井部は丸みを有し、天井部から口縁部にかけて緩やかにカーブして下がり、口縁端部は丸くおさめる。10は外面全体に緑褐色の自然釉がかかるため、天井部外面の調整は不明であるが、それ以外は回転ナデである。復元口径13.2 cm、復元器高3.8 cmである。11は天井部外面にヘラ切り痕を有し、それ以外は回転ナデである。復元口径13.4 cm、復元器高3.9 cmである。

12は覆土から出土した須恵器杯身である。底部を欠損しているが、天井部は緩やかにカーブしている。たちあがり部は外反気味に立ち上がり、受部はやや上方に伸びている。全体に回転ナデを施す。復元口径13.8 cmである。

13は覆土下層から出土した土師器高杯である。底径5.4 cmと小型のものであり、土製支脚の可能性もある。杯部は底部のみの残存であるが、急角度で立ち上がることから杯部の口径もかなり

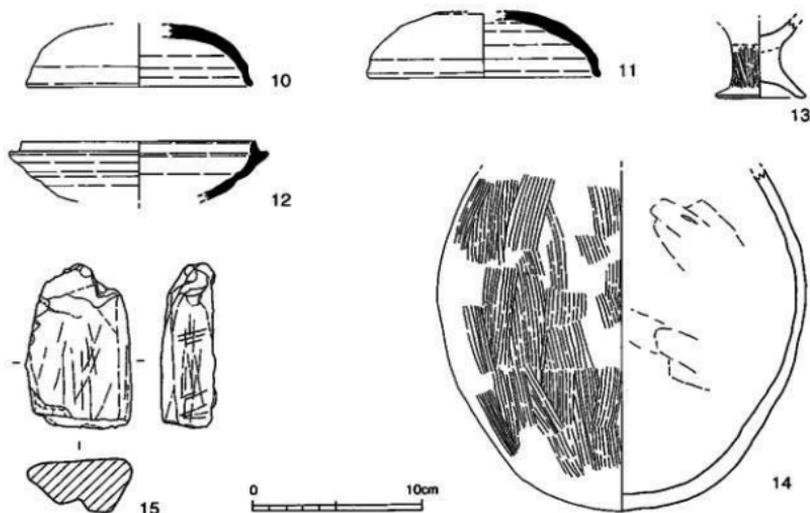
小さくなると思われる。杯部底部から脚部にかけては2.7cmの厚みがある。脚端部付近はヨコナデ、脚部外面はヘラミガキ、内面はナデである。杯部内面はナデを施し、外面もナデと思われる。

14は覆土下層及び北東部床面から出土した土師器甕である。胴部から底部にかけて残存し、口縁部は欠損している。胴部の張りは大きくないが、丸みもち、最大径は22.0cmである。胴部外面はハケ目、内面はかなり摩滅しているが、ヘラケズリの痕跡が残る。底部内面の調整は不明である。胴部外面全体に煤が付着している。

15は床面から出土した砥石である。長さ9.75cm、幅6.2cm、厚さ3.2cm、重さ253.5gで、長方形に近い形状をなしているが、表面と片方の側面は平坦ではない。表面と片方の側面を使用しており、使用面は平滑で、縦方向の擦痕がみられる。石材は凝灰岩と思われる。

その他、覆土下層から須恵器高杯脚部・甕、土師器瓶が出土したが、細片のため図示できなかった。須恵器高杯脚部片は、SB1床面出土の破片と接合した。

なお、SK2から遺物は出土していない。

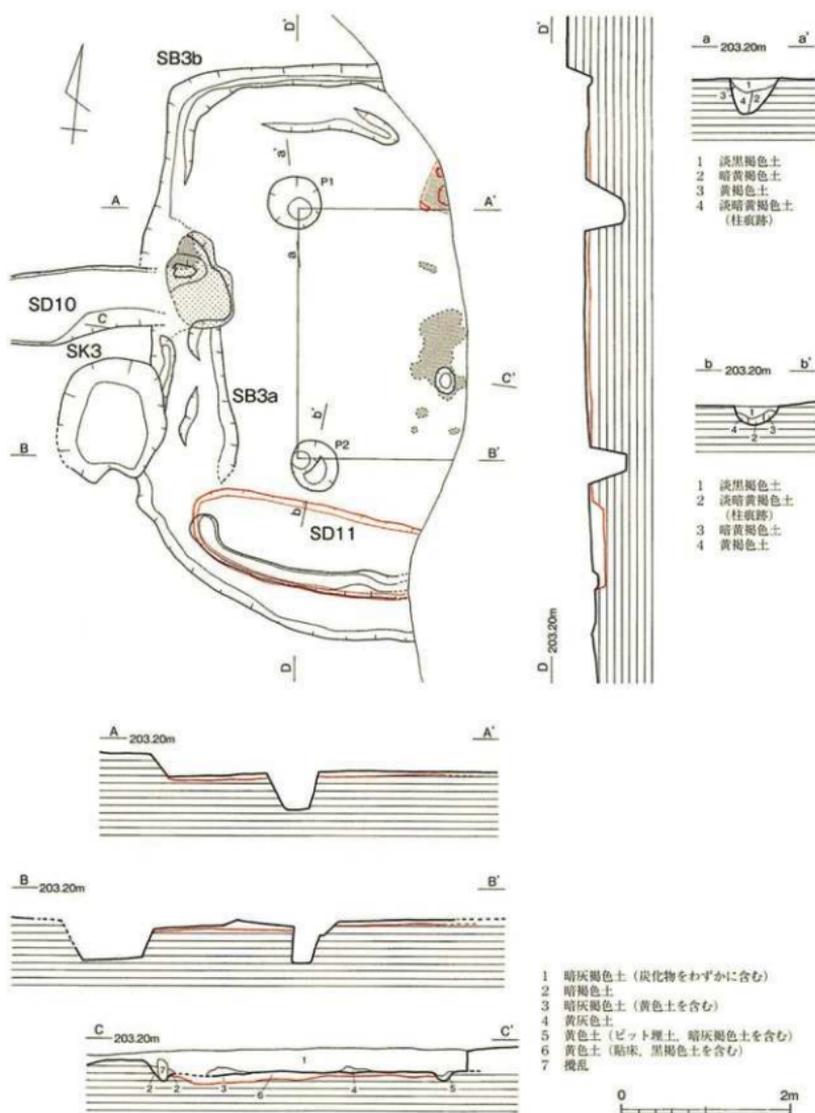


第10図 SB2出土遺物実測図(1:3)

### (3) SB3

検出遺構(第11図、図版3-b・c、4-a)

SB3は調査区南東部に位置する竪穴住居跡である。小尾根上に造られているが、南半の地形は下がっている。SB1の4.8m東側にあり、4.7m南側にはSB4がある。東側は調査区外となるため、西半分を調査した。SB3の平面形態は方形で、建て替えが行われ、SB3a(古)→



第11図 SB3・SD11・SK3実測図 (1:60) (アミ目密は焼土, アミ目粗は炭化物範囲)

S B 3 b (新)の新旧2時期がある。S B 3 aは南北方向約5.85 mであるが、東西方向が現状3.3 mである。S B 3 bは南北方向6.9 m、東西方向が現状3.75 mで、南北方向は北側へ55 cm、南側へ50 cm程度、東西方向は西側へ45 cm程度拡張を行っている。東側が調査区外であるため、柱穴は2基(P 1・2)しか検出できなかつたが、4本柱と推定される。西側壁際に造り付けのカマド跡がある。床面は黄色土で貼床をしている。覆土は暗灰褐色土の単一層である。P 1-P 2の方向は、ほかの堅穴住居跡の南北方向の柱穴とは方向がずれている。

壁高は最も残りの良い北西隅部において32 cmである。S B 3 aの壁溝は北・西・南の3方向とも廻っているが、北壁は東側、西壁は北半分と南端でそれぞれ途切れている。北壁及び南壁の壁溝の上端幅18~29 cm、深さは最大で17 cmである。西壁の壁溝は上端幅34~70 cmである。S B 3 bの壁溝は北壁と西壁で確認されたが、西側中央付近で途切れている。壁溝の上端幅22~48 cm、深さは最大で10 cmである。

柱間距離は、南北方向のP 1-P 2間が2.98 mで、ほかの堅穴住居跡と比較すると広くなっている。柱穴はほぼ円形である。各柱穴の規模は、P 1が径63 cm、深さ47 cm、P 2が長径64 cm×短径56 cm、深さ50 cmである。いずれも柱穴内に柱痕跡と推定される淡暗黄褐色土が円形に入り、P 1は径21 cm、P 2は径18 cmの柱が復元できる。

明瞭な炉跡を検出することはできなかつたが、床面中央部に長さ108 cm、幅57 cmの範囲に炭化物と焼土が集中しており、炉跡が近くにあったものと推定される。また、北部中央の貼床下で長さ64 cm、現状幅30 cmの焼土を多く含む土塊を検出した。土塊の周囲にある長さ10~15 cmの2つの石も焼けていた。

カマド跡は、新しい時期の溝であるSD 10によってかなり壊されており、残存状況は良くない。削り残した地山の上に粘質土で形成された袖部の片方だけが、長さ48 cm、幅40 cm、高さ12 cmほど残存している。上部は失われており、煙道も残存していない。袖部を中心に長径117 cm、短径74 cmの範囲に炭化物が堆積している。また、袖部の北側には焼土が堆積している。

貼床を除去したところ、南側で東西方向のSD 11を検出した。S B 3 aよりも古い遺構と考えられる。また、S B 3の南西端にSK 3が位置し、切り合い関係にあるが、SK 3の方が新しい。出土遺物(第12図、図版14)

北西床面を中心に、須恵器杯蓋・高杯脚部、土師器甕が出土した。

16は覆土下層から出土したかえりのない須恵器杯蓋である。天井部から口縁部にかけてのカーブは比較的急である。内外面とも回転ナデである。

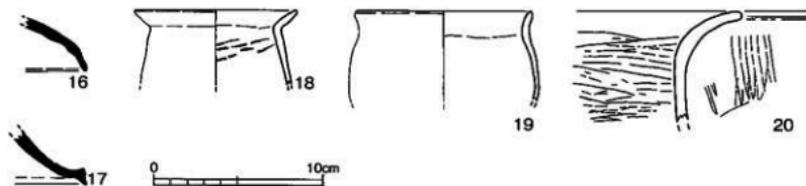
17は覆土上層から出土した須恵器高杯脚部である。ラッパ状に大きく開き、端部は下方に屈曲させている。内外面とも回転ナデを施す。

18・19は土師器の小型甕である。18は覆土下層及び床面から出土した。口頸部が「く」字状に外反する。内面の頸部下半以下をヘラケズリして器壁を薄く仕上げている。頸部上半から口縁部は内外面ともヨコナデを施すが、胴部外面は煤が付着しており、調整は不明である。復元口径9.4 cmである。19は貼床下から出土した。口縁部がわずかに外反する。全体的に摩滅が著しく、調整

は不明である。復元口径は10.3 cmである。

20は壁溝近くの床面から出土した土師器甕である。比較的長い口頸部をもち、口縁部はカーブを描きながら外反し、胴部は直線的に延びる。口縁部はヨコナデで、胴部内面は横方向のハケ目と思われ、頸部から胴部外面は粗い縦方向のハケ目である。胴部外面に煤が付着している。

その他、覆土下層から須恵器杯身、覆土上層から須恵器甕が出土したが、細片のため図示できなかった。また、貼床下から鉄片、P2から鉄滓(12.1 g)が微量出土した。



第12図 SB3出土遺物実測図(1:3)

#### (4) SB4

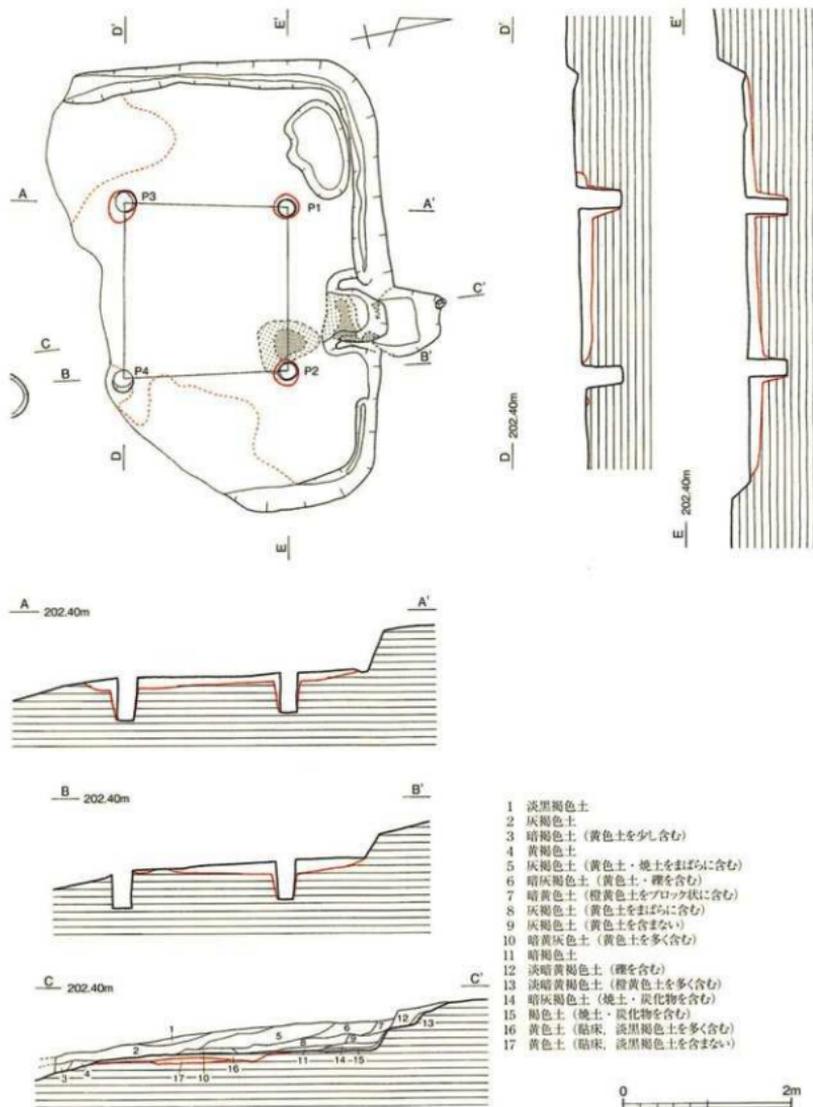
検出遺構(第13・14図、図版4-b・c、5-a)

SB4は、調査区の南東隅に位置する竪穴住居跡である。SB2の7.2 m東側、SB3の4.7 m南側にある。SB4の平面形態は方形であるが、南側は斜面で流失している。規模は東西方向が5.4 mで、南北方向は東側で1.8 m、西側で3.7 m、最も残りが良い部分で3.95 mである。建物はP1~P4を柱穴とする4本柱で、北側壁際に造り付けのカマド跡がある。床面は黄色土で貼床をしている。貼床上では柱の痕跡のみ確認することができ、貼床を除去した段階で柱穴を確認することができた。住居跡覆土は何層にも堆積していた。

壁高は最も残りの良い北壁西部において51 cmである。壁溝は東壁を除いて廻っているが、北壁はカマド跡で途切れている。壁溝の上端幅21~48 cm、深さは最大で5 cmである。

柱間距離は、東西方向のP1-P2間が1.95 m、P3-P4間が2.1 m、南北方向のP1-P3間が1.95 m、P2-P4間が1.95 mで、平均1.99 mである。柱穴は円形のものが多く、埋土は灰褐色土または黄灰褐色土である。各柱穴の規模は、P1が径29 cm、深さ49 cm、P2が径30 cm、深さ47 cm、P3が長径39 cm×短径33 cm、深さ53 cm、P4が長径27 cm×短径24 cm、深さ45 cmである。ほかの竪穴住居跡に比べ、柱穴の径が小さい。いずれも径19 cm程度の円形の柱痕跡が残る。

カマド跡は、地山を削り残した上に淡黄色土などを重ねて袖部を形成しており、東側の袖部は長さ70 cm、幅28 cm、高さ19 cm、西側の袖部は長さ80 cm、幅33 cm、高さ9 cmが残存している。然焼部は幅44 cm、長さ75 cmの長方形である。SB1と同様に焚口が狭くなるよう両袖部を湾曲させていたと考えられ、焚口の幅は現状で33 cmであるが、本来はもう少し狭かったと考えられ



第13図 SB4実測図(1:60)(アミ目密は焼土。アミ目粗は炭化物集中範囲。赤破線は貼床範囲)

る。上部は失われているが、煙道は燃焼部よりも一段高く設け、残存規模は長さ70cm、幅55cmで、北西端に長さ13cmの石を置いている。燃焼部奥壁と東壁にかけて焼土が堆積し、燃焼部全体に炭化物が多く堆積している。また、カマド跡の南東部に近接して焼土や炭化物を多く含む範囲が認められるが、これはカマドから掻き出されたものと考えられる。

床面北西隅に浅い落ち込みがある。平面形は長円形で、長さ120cm、短径73cm、深さ1~5cmであり、底面はほぼ平坦である。

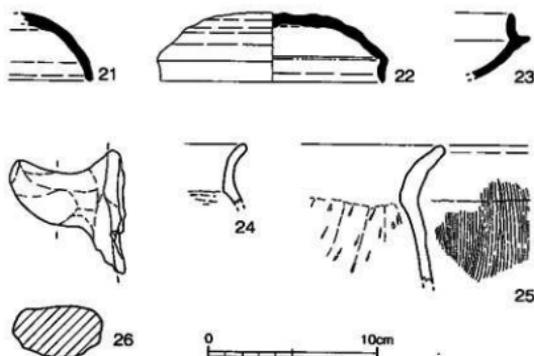
#### 出土遺物 (第15図, 図版14)

須恵器杯蓋・杯身, 土師器甕・甕把手, 砥石が出土した。

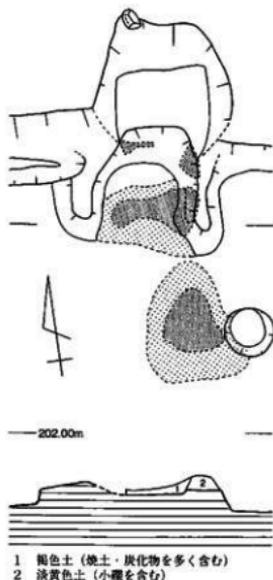
21・22は覆土上層から出土した須恵器杯蓋である。21は天井部から口縁部にかけてのカーブが比較的急である。全体に回転ナデを施す。22は天井部が緩やかにカーブした後、口縁部を垂直に屈曲させている。天井部外面はヘラ切り後ナデ, 天井部内面はナデ, その他の部分は回転ナデを施す。復元口径は13.1cm, 復元器高は4.1cmである。

23は覆土上層から出土した須恵器杯身である。たちあがり部が比較的高く、直線的に立ち上がる。また、受部は水平に伸びている。全体的に回転ナデを施す。外面には薄く自然釉がかかる。

24・25は覆土上層から出土した土師器甕である。ともに頸部で折れ、口縁部は緩やかに外反する。口頸部はヨコナデ,



第15図 SB4出土遺物実測図 (1:3)

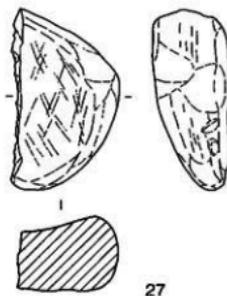


- 1 褐色土 (焼土・炭化物を多く含む)
- 2 淡黄色土 (小礫を含む)

0 1m

第14図 SB4カマド跡実測図 (1:30)

(アミ目密は焼土, アミ目粗は炭化物範囲)



胴部内面はヘラケズリである。25の胴部外面は縦方向のハケ目である。24よりも25の器壁が厚く、大型である。

26は土師器甗の把手と考えられる。覆土下層から出土した。上方に湾曲し、断面は楕円形である。

27は覆土下層から出土した砥石である。長さ10.6 cm、幅6.1 cm、厚さ4.6 cm、重さ377.4 gで、半円形を呈している。表面と裏面及び側面の丸い部分を使用している。表面を最もよく使用しており、使用面は平滑で、縦方向の擦痕がみられる。石材は凝灰岩と思われる。

その他、覆土上層及び下層から須恵器甕、覆土下層から須恵器長頸壺や須恵器平瓶と思われる破片が出土したが、細片のため図示できなかった。また、覆土上層及び下層から鉄片、覆土上層から鉄滓(67.1 g)が少量出土した。

## 2 掘立柱建物跡

### (1) SB5

検出遺構(第16図、図版5-c、6-a・b)

調査区中央北寄りに位置する南北棟の掘立柱建物跡である。建物方位はほぼ真北である。2.6 m南側にSB6が位置し、その間にはSD7がある。また、0.3～0.7 m西側には南北方向のSD2・3がある。高所部である南西側の地山を掘削することにより、平坦面を造成して、建物を建てている。SB6もこの平坦面に建てられている。SB5の東側と北側が調査区外となり、現状で南北3間、東西2間である。周辺の建物跡の規模などから考えると東や北に延びる可能性は低いようである。

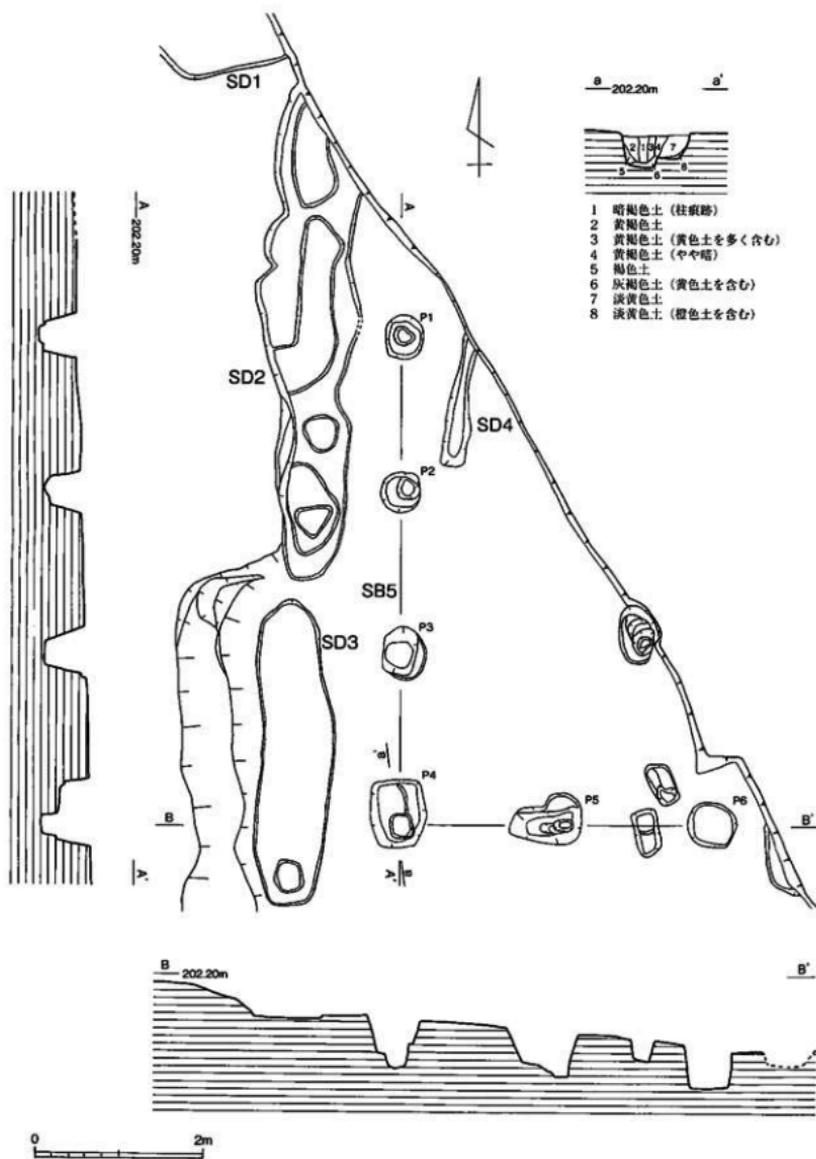
現状で、桁行方向の規模は5.8 m、梁行方向の規模は3.7 mである。桁行方向の柱間距離はP1-P2間が1.8 m、P2-P3間が2.0 m、P3-P4間が2.0 mで、平均1.93 mである。梁行方向の柱間距離はP4-P5間が2.0 m、P5-P6間が1.7 mで、平均1.85 mである。

柱穴は堅い地面を穿っており、径40～60 cmのものが多く、方形に近い円形または楕円形である。各柱穴の規模は、P1が長径52 cm×短径44 cm、深さ46 cm、P2が長径50 cm×短径46 cm、深さ47 cm、P3が長径63 cm×短径50 cm、深さ51 cm、P4が長径81 cm×短径67 cm、深さ63 cm、P5が長径85 cm×短径61 cm、深さ59 cm、P6が長径57 cm×短径54 cm、深さ51 cmである。P4は2基の柱穴が重なっているが、中央に暗褐色土が入り、円形の柱痕跡と思われる。土層断面では径12 cmと細いが、平面では径16 cmの柱痕跡が確認できる。P1・P2でも径約16 cmの円形の柱痕跡が残る。

建物跡北部にあるSD4は、建物内にあることから建物に伴うものではないと思われるが、建物との新旧関係は不明である。

### 出土遺物

柱穴から須恵器・土師器・鉄板片が出土しているが、細片のため図示できなかった。また、覆土から須恵器杯、土師器甕、鉄板片等の細片が出土している。なお、本遺構に伴うと考えられる



第 16 図 S B 5 実測図 (1 : 60)

SD2から須恵器杯蓋(28)、土師器甕(29)が、SD3から須恵器高杯(30)、土師器手づくね椀(31)・甕(32)・甌(33・34)・甌把手(35)が出土している。

## (2) SB6

### 検出遺構(第17図, 図版7-b・c)

調査区中央やや北寄りに位置する南北3間、東西2間の南北棟掘立柱建物跡である。建物方位はほぼ真北である。SB5の2.6m南側に位置し、その間にはSD7がある。高所部である西側の地山を掘削することにより、平坦面を造成して、建物を建てている。この平坦面の南端にはSX4がある。0.3~0.7m西側には南北方向のSD6があり、北部で東方向に直角に折れ曲がり、L字状を呈している。建物跡東部にあるSD8・SX3と切り合い関係にあるが、SB6の方が新しい。また、南東端でSA1と接する。

桁行方向の規模は5.15m、梁行方向の規模は3.3mである。桁行方向の柱間距離は西辺のP1-P4間が1.9m、P4-P6間が1.7m、P6-P8間が1.55m、東辺のP3-P5間が1.7m、P5-P7間が1.55m、P7-P9間が1.9mで、平均1.72mである。梁行方向の柱間距離は北辺のP1-P2間が1.55m、P2-P3間が1.75m、南辺のP8-P9間が1.55m、P9-P10間が1.75mで、平均1.65mである。

柱穴は堅い地面を穿っており、径40~55cmのものが中心で、方形に近い円形または楕円形を呈するものが多い。各柱穴の規模は、P1が径46cm、深さ69cm、P2が径50cm、深さ54cm、P3が長径47cm×短径40cm、深さ42cm、P4が長径55cm×短径50cm、深さ69cm、P5が長径44cm×短径35cm、深さ33cm、P6が長径48cm×短径44cm、深さ59cm、P7が径38cm、深さ23cm、P8が長径53cm×短径50cm、深さ60cm、P9が長径89cm×短径36cm、深さ34cm、P10が長径45cm×短径40cm、深さ36cmである。P6土層断面を見ると、中央に暗褐色土が入っており、径約16cmの円形の柱痕跡と思われる。P1・P4などでも径約16cmの円形の柱痕跡を確認することができた。

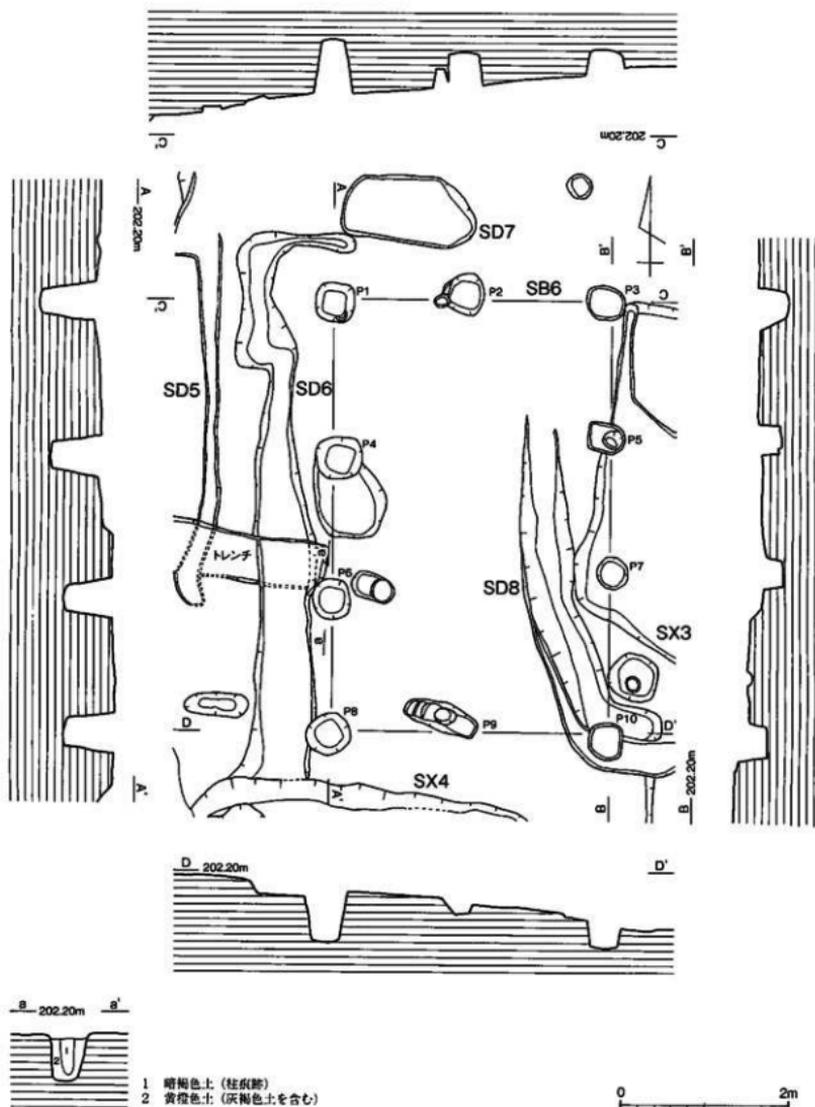
### 出土遺物

柱穴から須恵器・土師器が出土しているが、細片のため図示できなかった。なお、本遺構に伴うと考えられるSD5から須恵器杯身(36)・高杯(37)、土師器小型椀(38)・甕(39)が、SD6から須恵器杯身(40)・高杯(41)、土師器小型椀(42)・甕(43~46)・甌把手(47)が、SD7から須恵器杯身(48)、土師器甕(49)・甌(50)が出土している。

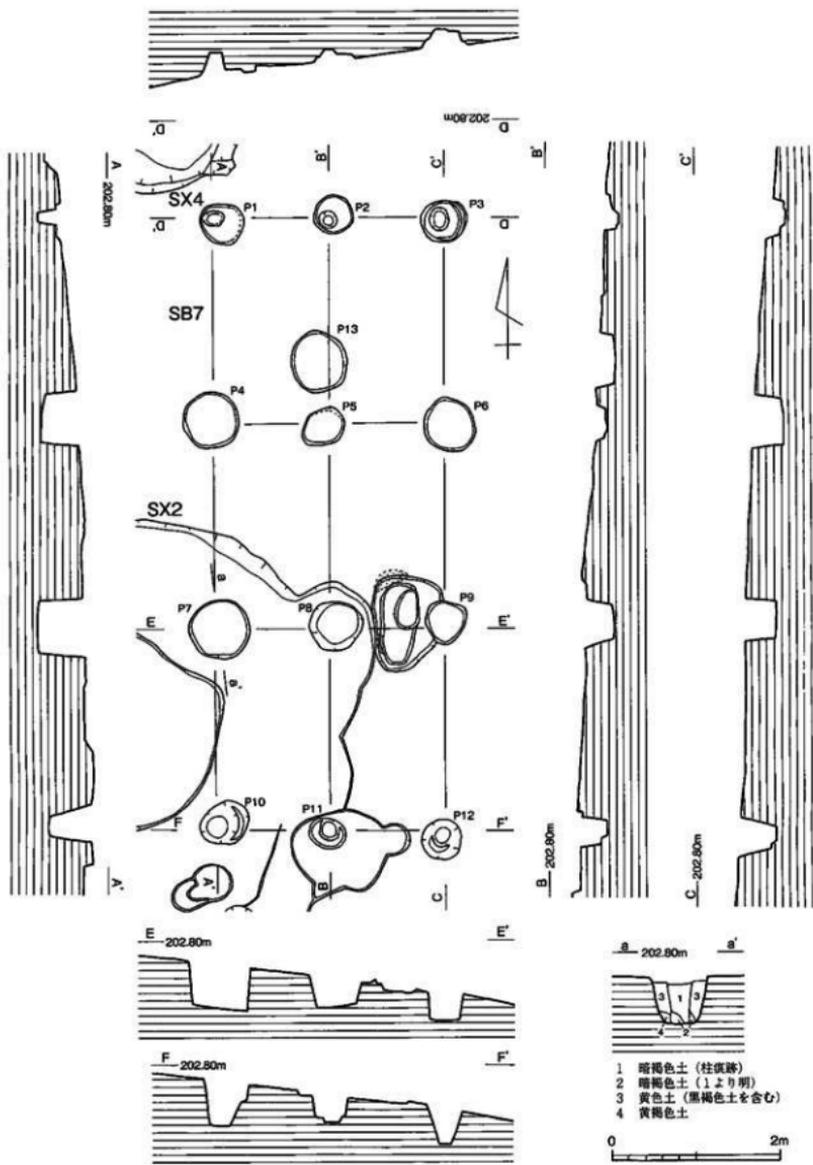
## (3) SB7

### 検出遺構(第18図, 図版9-a・b・c)

調査区中央に位置する南北3間、東西2間の南北棟の総柱掘立柱建物跡である。SB6の3.7m南に位置し、北側はSX4と近接している。建物方位はほぼ真北である。建物跡南西部にあるSX2と切り合い関係にあるが、SB7の方が新しい。この建物跡は、高床式倉庫と推定される。



第17図 SB6実測図 (1:60)



第18図 SB7実測図 (1:60) (アミ目は炭化物範囲)

P 2とP 5の間にあるP 13は、東柱の可能性もある。

桁行方向の規模は7.3m、梁行方向の規模は2.75mである。桁行方向の柱間距離は北からP 1 - P 4間・P 2 - P 5間・P 3 - P 6間が2.45m、P 4 - P 7間・P 5 - P 8間・P 6 - P 9間が2.45m、P 7 - P 10間・P 8 - P 11間・P 9 - P 12間が2.4mで、平均2.43mである。梁行方向の柱間距離は西からP 1 - P 2間・P 4 - P 5間・P 7 - P 8間・P 10 - P 11間が1.4m、P 2 - P 3間・P 5 - P 6間・P 8 - P 9間・P 11 - P 12間が1.35mで、平均1.38mである。ほかの建物跡に比べ、桁行方向の柱間距離が長く、梁行方向の柱間距離が短くなっている。

柱穴は円形のものが多く、径約70cmの大型のものと径約50cmの小型のものがある。各柱穴の規模は、P 1が長径53cm×短径49cm、深さ28cm、P 2が径47cm、深さ16cm、P 3が長径55cm×短径49cm、深さ25cm、P 4が径66cm、深さ48cm、P 5が長径54cm×短径44cm、深さ18cm、P 6が長径66cm×短径59cm、深さ39cm、P 7が長径73cm×短径70cm、深さ55cm、P 8が長径64cm×短径58cm、深さ38cm、P 9が長径52cm×短径48cm、深さ37cm、P 10が長径61cm×短径49cm、深さ56cm、P 11が長径44cm×短径36cm、深さ32cm、P 12が径47cm、深さ48cmである。東柱の可能性のあるP 13が長径75cm×短径67cm、深さ26cmである。P 7の土層断面を見ると中央に暗褐色土が入り、径25cmの円形の柱痕跡と考えられる。その他多くの柱穴でも、断面や平面から径16～25cmの円形の柱痕跡を確認することができた。

#### 出土遺物

柱穴から土師器甕の破片が出土しているが、細片のため図示できなかった。

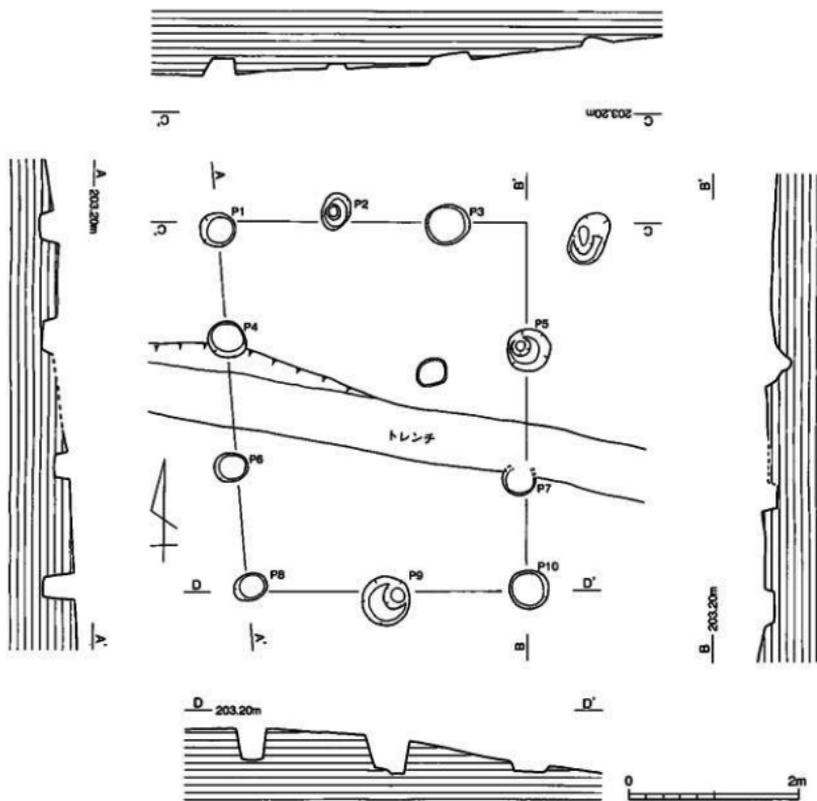
#### (4) SB 8

##### 検出遺構 (第19図、図版10-a・b)

調査区中央やや北寄りに位置する南北3間、東西2間の南北棟掘立柱建物跡である。建物方位はほぼ北である。SB 6の4.1m西側に位置し、その間にはSD 5・6がある。

北東隅にあたる柱穴が検出できなかったが、桁行方向の規模は西辺で4.4m、東辺も推定4.4m、梁行方向の規模は北辺で推定3.65m、南辺で3.3mである。梁行方向が南辺よりも北辺が約0.3m長くなっており、桁行方向の方位も東辺はほぼ北であるが、西辺は北からずれている。このように、ほかの建物跡と違い、柱位置が不揃いで、ややいびつな平面形になっている。桁行方向の柱間距離は西辺のP 1 - P 4間が1.4m、P 4 - P 6間が1.55m、P 6 - P 8間が1.45m、東辺のP 5 - P 7間が1.55m、P 7 - P 10間が1.35mで、平均1.46mである。梁行方向の柱間距離は北辺のP 1 - P 2間が1.4m、P 2 - P 3間が1.3m、南辺のP 8 - P 9間が1.8m、P 9 - P 10間が1.5mである。北辺の柱間距離が南辺よりも短くなっている。ほかの建物跡と比較して、全体的に柱間距離が短い。

柱穴は径45～50cmの円形のものが多い。各柱穴の規模は、P 1が径40cm、深さ24cm、P 2が長径45cm×短径33cm、深さ20cm、P 3が長径53cm×短径49cm、深さ12cm、P 4が径45cm、深さ17cm、P 5が径51cm、深さ37cm、P 6が長径39cm×短径33cm、深さ18cm、P 7が



第19図 SB8実測図 (1:60)

径 39 cm, 深さ 18 cm, P 8 が長径 40 cm × 短径 31 cm, 深さ 39 cm, P 9 が長径 58 cm × 短径 55 cm, 深さ 48 cm, P 10 が径 46 cm, 深さ 12 cm である。

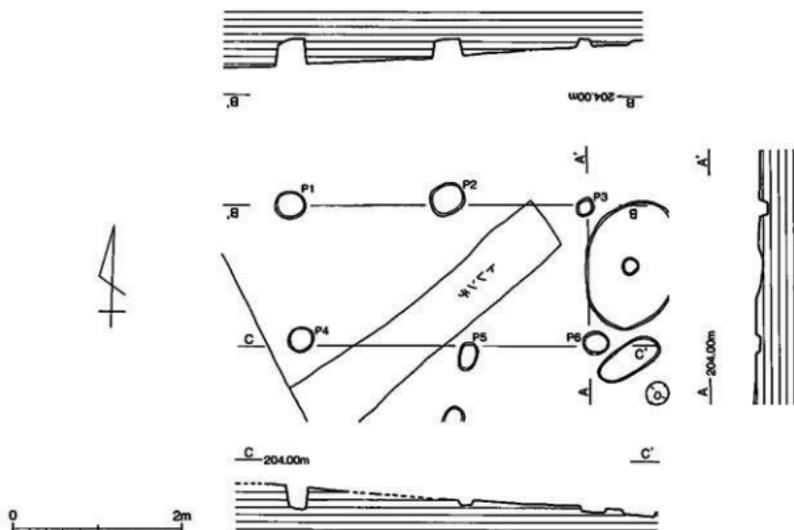
#### 出土遺物

土師器が出土しているが、細片のため図示できなかった。

#### (5) SB9

##### 検出遺構 (第20図, 図版10-c)

調査区西部南寄りに位置する東西棟の掘立柱建物跡である。建物方位はほぼ東西方向である。SB7の6.3m南西側に位置し、その間にはSX2がある。SB9の西側が調査区外となり、さ



第20図 SB9実測図 (1:60)

らに延びる可能性もあるため正確な規模は不明であるが、現状で南北1間、東西2間以上である。

桁行方向の規模は現状で北辺3.55m、南辺3.45m、梁行方向の規模は1.65mである。桁行方向の柱間距離はP1-P2間が1.85m、P2-P3間が1.7m、P4-P5間が2.0m、P5-P6間が1.45mで、平均1.75mである。

柱穴は、円形で径30~40cmのものが多い。各柱穴の規模は、P1が長径36cm×短径32cm、深さ33cm、P2が長径42cm×短径37cm、深さ26cm、P3が長径23cm×短径19cm、深さ9cm、P4が径30cm、深さ32cm、P5が長径34cm×短径21cm、深さ5cm、P6が長径30cm×短径27cm、深さ6cmである。

#### 出土遺物

柱穴から須恵器杯、土師器が出土しているが、細片のため図示できなかった。

#### (6) SB10

##### 検出遺構 (第21図、図版11-a)

調査区北部に位置する掘立柱建物跡である。SB8の18.1m北側に位置する。また、SB5の約10.5m北西側の位置にあり、その間にはSD1がある。SB10の北側及び東側が調査区外となり、さらに延びる可能性もあるため正確な規模は不明であるが、現状で南北2間以上、東西1

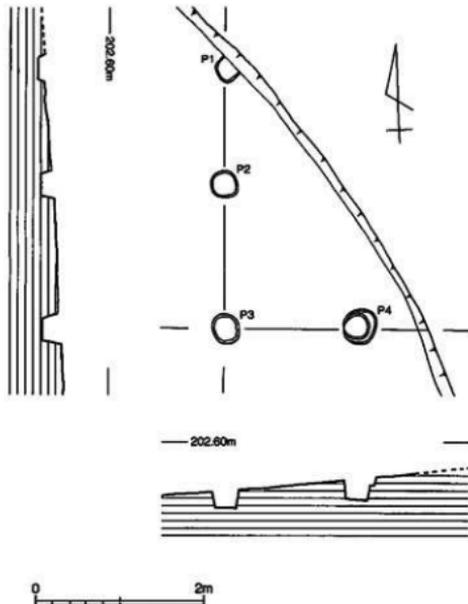
間以上である。地形やほかの建物跡との関係から南北棟建物である可能性が高いと思われる、その場合の方位はほぼ真北である。

現状で南北方向の規模は3.1 m、東西方向の規模は1.6 mである。南北方向の柱間距離はP1 - P2間が1.4 m、P2 - P3間が1.7 mで、平均1.55 mである。

柱穴は、円形で径30～40 cmのものが多い。各柱穴の規模は、P1が現状で径33 cm、深さ9 cm、P2が径31 cm、深さ12 cm、P3が長径36 cm×短径32 cm、深さ22 cm、P4が長径43 cm×短径40 cm、深さ28 cmである。

#### 出土遺物

遺物は出土していない。



第21図 SB 10実測図 (1:60)

### 3 柱穴列

#### (1) SA 1

検出遺構 (第22図, 図版6-c, 7-a・b)

SB 6の南東に位置する東西方向の柱穴列である。P1はSB 6とほぼ接している。P3の東側が調査区外となり、さらに延びる可能性もあるため正確な規模は不明である。現状で柱穴3基からなり、全長は3.3 mである。各柱間の距離は、P1 - P2が1.7 m、P2 - P3が1.6 mで、平均1.65 mである。柱穴は、円形または方形に近い円形を呈する。各柱穴の規模は、P1が径61 cm、深さ47 cm、P2が径55 cm、深さ58 cm、P3が径52 cm、深さ53 cmである。P1の土層断面を見ると、中央に暗灰褐色土が入り、柱痕跡と推定される。径12 cmと細いが、P1・P3の底面に残る小ピットも柱痕跡と考えられ、これから径約15 cmの円形柱を復元することができる。

本遺構の西側にSD 8があり、直交することから両遺構は関連が深いものと思われる。SD 8とSB 6は切り合い関係にあり、SD 8の方が古い。SA 1とSB 6は方向がずれていることから両遺構が同時期に存在したとは考えにくく、SA 1の方が古いと考えられる。なお、SA 1はSX 3とも切り合い関係にあり、SA 1の方が新しい。

#### 出土遺物

遺物は出土していない。

#### 4 溝状遺構

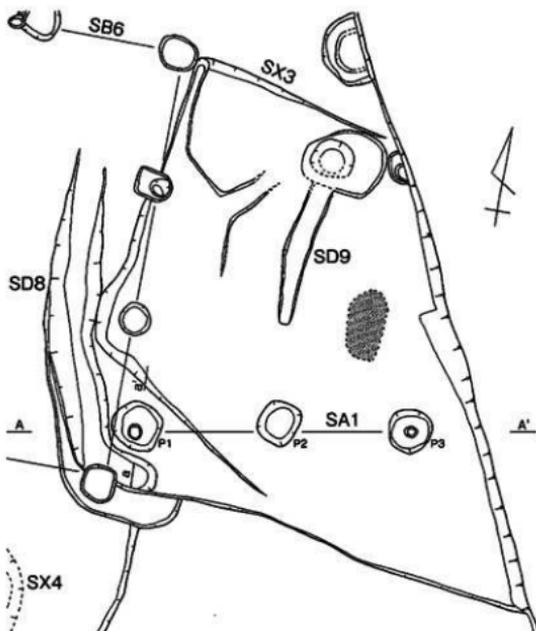
##### (1) SD1

検出遺構 (第5図, 図版5-c)

調査区北部に位置する東西方向の溝状遺構である。SB5の北西にあり、SB5-P1との距離は3.3mである。東側が調査区外になるため不明である。SB5の北端を区画する溝の可能性もあるが、定かではない。現状で、長さ4.1m、幅0.55~1.83m、深さ0.06~0.25mであり、西側より東側が広がっている。底面は平坦になっており、西端と東側のレベルはほぼ同じで、中央部が若干低くなっている。

出土遺物

遺物は出土していない。



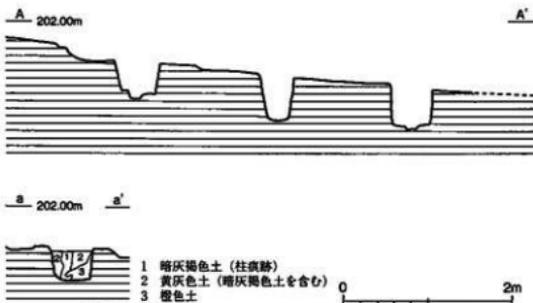
##### (2) SD2

検出遺構 (第16図, 図版5-c, 6-a)

SB5の北西に位置する南北方向の溝状遺構で、南側のSD3とともにSB5の西側を画する溝と考えられる。SB5との距離は0.3~0.7mである。北側に延びているが、北側は調査区外になる。現状で、長さ5.92m、幅0.69~1.18m、深さ0.04~0.23mである。底面は平坦ではなく、溝状に深くなる部分やピット状に深くなる部分も見られ、北に向かって下っている。

出土遺物 (第23図, 図版14)

須恵器杯蓋, 土師器甕が出土した。

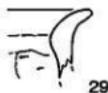


第22図 SA1・SX3実測図 (1:60) (アミ目は焼土範囲)

28は須恵器杯蓋である。天井部から口縁部にかけて緩やかにカーブし、口縁端部は丸くおさめる。天井部外面はヘラ切り後ナデ、天井部内面はナデ、それ以外は回転ナデである。復元口径は124 cm、器高は3.6 cmである。焼成は不良で、灰白色を呈す。

29は土師器甕である。口頸部は厚く、口縁部は短く外反する。口頸部はヨコナデ、胴部内面はヘラケズリである。

その他、須恵器甕、土師器甕が出土しているが、細片のため図示できなかった。



第23図 SD2出土遺物実測図  
(1:3)

### (3) SD3

検出遺構(第16図、図版5-c、6-a)

SB5の南西に位置する南北方向の溝状遺構で、北側のSD2とともにSB5の西側を面する溝と考えられる。SB5との距離は0.75~0.95 mである。長さ3.65 m、幅0.73~0.85 m、深さ0.02~0.13 mである。底面は南部がピット状に若干深くなっているが、全体的には北に向かって下っている。

出土遺物(第24図、図版14・15)

須恵器高杯、土師器手づくね碗・甕・甕が出土した。

30は須恵器高杯である。杯部は丸みのある底部からゆるやかに内湾気味に立ち上がる。脚部はラッパ状に大きく開き、端部は下方に屈曲させて拡張している。内外面とも回転ナデを施す。復元底径は10.3 cmである。焼成は不良で、淡青灰色を呈す。

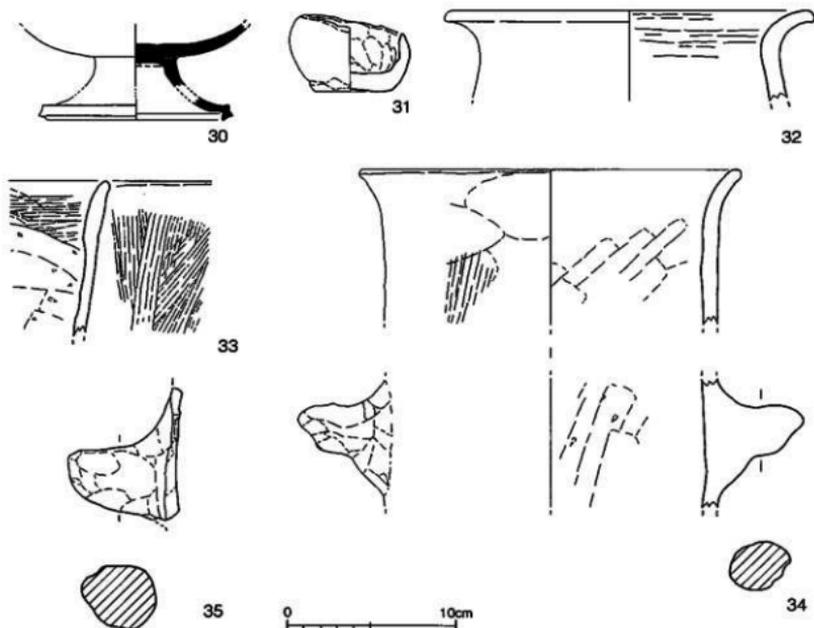
31は土師器手づくねの小型碗である。内面に指頭圧痕を残し、外面は指頭による整形後、ナデを施している。底部はほぼ平らになるように仕上げている。復元口径は5.9 cm、器高は4.7 cmである。この土器は祭祀に使用されたものと考えられる。

32は土師器甕である。口縁部が短く強めに外反し、口縁端部は丸くおさめる。口縁部は内外面ともヨコナデで、頸部内面は横方向に平行する線が残り、ハケ目の可能性がある。胴部内面はヘラケズリと思われる。外面は摩滅のため調整は不明である。復元口径は21.0 cmである。

33・34は土師器甕である。33は体部が直線的で、下部がすぼまる形態である。口縁端部付近でわずかに外反し、端部は丸くおさめる。口縁部はヨコナデで、体部内面上部は横方向のハケ目後ヨコナデと思われ、その下はヘラケズリ、外面は縦方向の粗いハケ目である。口縁部付近は内外面と広範囲に黒斑がある。34は口縁部が緩やかに外反し、端部を丸くおさめる。体部は直線的に下部に伸びる。体部外面に水平方向の把手がつく。口縁部はヨコナデで、体部内面はヘラケズリ、外面上部は指頭による整形後ナデ、その下は縦方向のハケ目である。復元口径は22.2 cmである。

35は土師器甕の把手と考えられる。水平方向に伸び、断面はややいびつな円形である。

その他、須恵器杯蓋・甕、すざが入ったカマド片が出土しているが、いずれも細片のため図示できなかった。すざが入ったカマド片は、移動式カマドの一部と推定される。



第24図 SD3出土遺物実測図(1:3)

#### (4) SD4

検出遺構(第16図, 図版5-c, 6-a)

SB5の北部にある南北方向の溝状遺構である。建物内部にあるため、建物に伴うものではないと思われるが、建物との新旧関係は不明である。調査区外の北に延びており、現状で長さ1.61m, 幅0.16~0.3m, 深さ0.03~0.07mである。底面は北に向かって下っている。

出土遺物

遺物は出土していない。

#### (5) SD5

検出遺構(第17図, 図版7-b・c)

SB6の西に位置する南北方向の溝状遺構で、SB6との距離は1.35~1.4mである。北側は自然に不明瞭となり、南側は建物跡の南端まで延びずに途中で終わっている。長さ4.45m, 幅0.14~0.29m, 深さ0.03~0.09mの細い溝である。底面は北に向かって下っている。本遺構とS

B 6の間にSD 6がある。

#### 出土遺物 (第 25 図, 図版 15)

須恵器杯身・高杯, 土師器小型碗・甕が出土した。

36は須恵器杯身である。たちあがり部は短く直線的に立ち上がり, 受部はやや上方に伸びている。底部は残存していないが, 全体に回転ナデを施す。

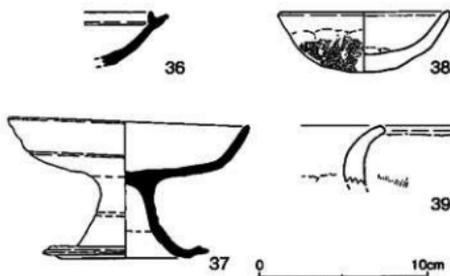
37は須恵器高杯である。杯部は平坦に近い底部から内湾気味に立ち上がっており, 底部と口縁部の境は明瞭である。

脚部はラッパ状に大きく開き, 端部は上方に屈曲させて尖り気味に終わっている。内外面とも回転ナデ, 底部内面は仕上げナデを施す。復元口径 14.1 cm, 復元底径 9.8 cm, 復元器高 8.6 cm である。淡青灰色を呈す。

38は土師器小型碗である。底部は丸く, 体部から口縁部まで緩やかにカーブを描き, 端部は丸くおさめる。体部外面及び底部内面には指頭圧痕が多く残る。口縁部はヨコナデで, 体部外面下部から底部外面にかけてハケ目を施す。復元口径 10.0 cm, 器高 3.7 cm である。須恵器杯身と形がよく似ており, 須恵器杯身を模して作られた可能性もある。

39は土師器甕である。口頸部は厚く, 口縁部は短く外反する。口頸部はヨコナデで, 胴部内面はヘラケズリ, 外面はハケ目である。

その他, 土師器甕・甕把手, すざが入ったカマド片が出土しているが, いずれも細片のため図示できなかった。すざが入ったカマド片は, SD 3 出土の物と同じく, 移動式カマドの一部と推定される。また, 鉄滓が少量 (69.1 g) 出土している。



第 25 図 SD 5 出土遺物実測図 (1 : 3)

## (6) SD 6

### 検出遺構 (第 17 図, 図版 7 - b・c, 11 - b)

SB 6の西に位置する南北方向の溝状遺構で, SB 6の西側を画する溝と考えられる。SB 6との距離は 0.3 ~ 0.7 m で, 西側にはSD 5がある。北側に向かうに従って, SB 6との距離が離れ, 北部で東側に直角に曲がっている。南側はSX 4によって切られている。全長約 7.9 m で, 南北の長さ 6.5 m, 東西の長さ 1.4 m である。幅 0.13 ~ 0.95 m, 深さ 0.01 ~ 0.19 m で, 北に向かうに従って幅が狭くなる。底面はほぼ平らで, 北に向かって下っている。

### 出土遺物 (第 26 図, 図版 15・16)

須恵器杯身・高杯, 土師器小型碗・甕・甕把手が出土した。なお, 本遺構出土の土師器甕片とSX 4出土の土師器甕 (65) が接合したが, 詳細はSX 4の項に記載した。

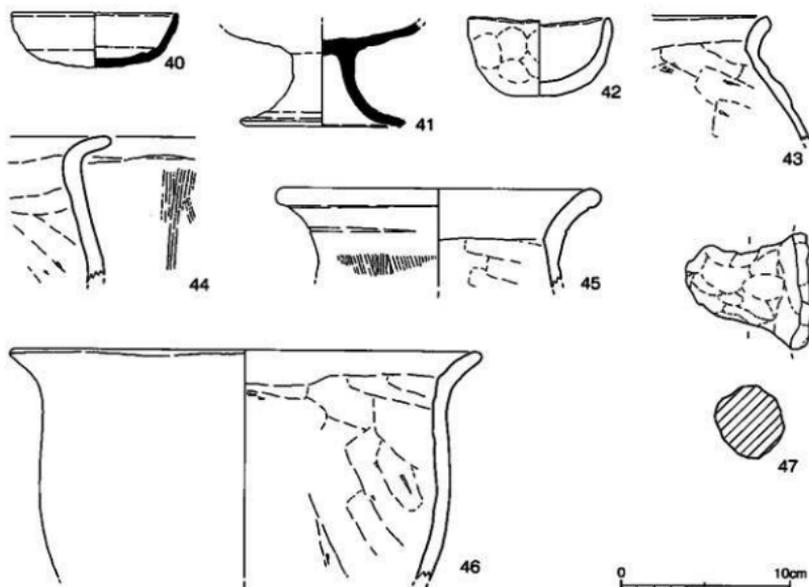
40は須恵器杯身である。底部は丸みを持ち, 底部から緩やかにカーブした後, 口縁部にかけて

カーブが急になる。端部はやや尖り気味におさめている。底部は内外面ともナデ、その他は回転ナデである。復元口径は9.7cm、器高は3.25cmと、口径が小さい形態である。

41は須恵器高杯である。杯底部はやや丸みをもっている。脚部はラッパ状に大きく開き、端部は面を形成するように終えている。脚部全体と杯部外面は回転ナデ、杯部内面は仕上げナデを施す。復元底径は9.0cmである。内面が淡青灰色、外面が青灰色を呈す。

42は土師器小型碗である。底部は丸く、体部から口縁部まで緩やかなカーブを描き、端部は丸くおさめる。全体の形はほぼ半球状を呈す。外面には指頭圧痕が多く残り、内面は指頭による形成後、ナデを施す。形にやや歪みがあり、口径8.4～9.0cm、器高4.75cmである。

43～46は土師器甕である。43は口縁部が短く外反し、胴部はほかの甕と違い、かなり膨らみをもつ。口頸部はヨコナデ、頸部内面に稜があり、胴部内面はヘラケズリにより器壁を薄くしている。外面の調整は不明である。44は頸部が「く」字状に曲り、口縁部が短く外反して、端部を丸くおさめる。口頸部はヨコナデ、胴部内面はヘラケズリ後ナデ、外面にはかすかにハケ目が残る。45は口縁部が緩やかに外反し、口縁端部はやや肥厚して玉縁状になる。内面の頸部以下をヘラケズリして胴部の器壁を薄く仕上げている。口頸部は内外面ともヨコナデ、胴部外面は縦方向のハケ目を施す。復元口径は18.2cmである。46は口縁部が短く外反し、胴部が若干膨らんでい



第26図 SD6出土遺物実測図(1:3)

る。口頸部はヨコナデ、胴部内面はヘラケズリ、外面はナデである。復元口径は27.4 cmである。口径に比べると器高が低いタイプと思われる。

47は土師器甔の把手と考えられる。上方にやや湾曲し、断面は円形に近い。

その他、鉄滓が少量(88.9 g)出土している。

## (7) SD7

検出遺構(第17図, 図版7-b・c)

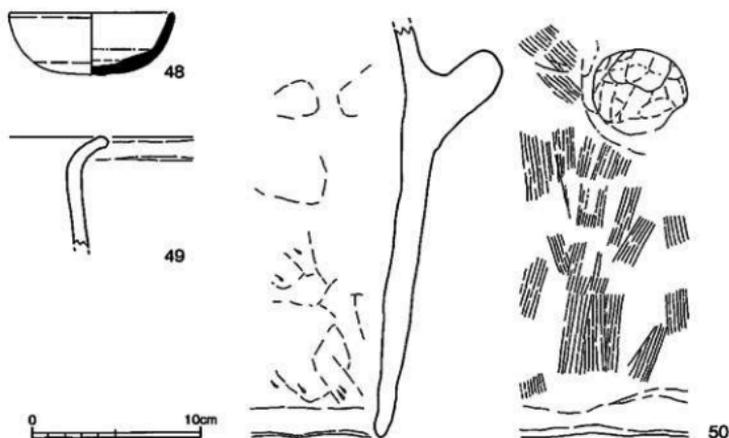
SB6の北に位置する東西方向の溝状遺構で、SB5とSB6の間を境する遺構である。SB5との距離は1.1 m、SB6との距離は0.6~0.75 mで、南西端はSD6と接している。建物跡の東端まで延びずに途中で終わり、形としては溝というよりは土坑状を呈しているが、SD6と連続することからSD7とした。長さ1.6 m、幅0.73~0.82 mで、深さ0.07~0.13 mである。底面はほぼ平らで、東に向かって下っている。

出土遺物(第27図, 図版16)

須恵器杯身、土師器甔・甔が出土した。

48は須恵器杯身である。底部は平坦でなく、丸みもち、底部から緩やかにカーブした後、口縁部にかけてカーブが急になる。端部はやや尖り気味におさめている。底部は内外面ともナデと思われる。その他は回転ナデである。復元口径は9.6 cm、器高は3.75 cmと、小さい口径の割には深さがある形態である。

49は土師器甔である。口縁部は短く外反し、端部を丸くおさめる。胴部の膨らみはなく、直線的である。口頸部はヨコナデである。胴部内面はヘラケズリと思われ、外面はナデと思われるが



第27図 SD7出土遺物実測図(1:3)

明瞭ではない。

50は土師器甕である。体部が直線的で、上部がすぼまる形態である。下端部付近でわずかに内湾し、端部は丸くおさめる。下端部はヨコナデを施すが、体部内面はヘラケズリ、体部外面は縦方向の粗いハケ目である。体部に把手が残存しており、斜め上方に直線的に伸び、断面は長円形である。

その他、須恵器臺・台付碗、土師器甕把手が出土しているが、細片のため図示できなかった。

## (8) SD8

検出遺構（第22図、図版6-c、7-b）

SA1・SX3の西に位置する南北方向の溝状遺構である。南部で東側に折れ曲がっており、北側は自然に不明瞭となっている。西側南半部は二段落ちになっている。長さ4.45m、幅0.35～0.6m、深さ0.01～0.19mである。底面はほぼ平らである。SA1と直交することから両遺構は関連が深いものと思われる。また、SD8はSB6の内部にあるが、同時期に存在したものではなく、SD8の方が古い。

出土遺物

遺物は出土していない。

## (9) SD9

検出遺構（第22図、図版6-c）

SB6の東に位置する南北方向の溝状遺構で、SB6との距離は1.6～1.8mである。SX3の内部北側にあり、北端はビットに切られて、消滅している。長さ1.72m、幅0.13～0.31mで、深さ0.02～0.04mの小規模な溝状遺構である。底面はほぼ平らである。SX3の西辺とほぼ平行するが、これに伴うかどうかは不明である。

出土遺物

遺物は出土していない。

## (10) SD10

検出遺構（第4図）

調査区南部に位置する東西方向の溝状遺構である。他の遺構とは時期が異なり、現代に近い時期の遺構である。SB1の南部、SB3の中央部を切っている。長さは現状で約25m、幅0.44～0.88m、深さ0.02～0.16mである。底部は東に向かって下っている。

出土遺物

流れ込んだ須恵器、土師器が出土しているが、いずれも細片のため図示できなかった。また、鉄滓が微量（13.7g）出土している。

(11) SD 11

検出遺構 (第 11 図)

SB 3 の南側貼床下で検出した東西方向の溝状遺構である。現状で長さ 264 m、幅 0.89 ~ 1.02 m、深さ 0.1 ~ 0.15 m で、さらに東側に続いている。比較的幅の広い溝状遺構で、底面はほぼ平坦である。覆土は黄灰色土である。南側肩部が SB 3 a の壁溝肩部とほぼ重なっている。貼床下から検出し、SB 3 a の壁溝よりも深く掘り込まれていることから SB 3 a よりも古い遺構と考えられる。

出土遺物

遺物は出土していない。

5 土坑

土坑は 7 基検出した。そのうち SK 1 は SB 1、SK 2 は SB 2 に伴うと考えられることから、堅穴住居跡のそれぞれの項に記述した。

(1) SK 3

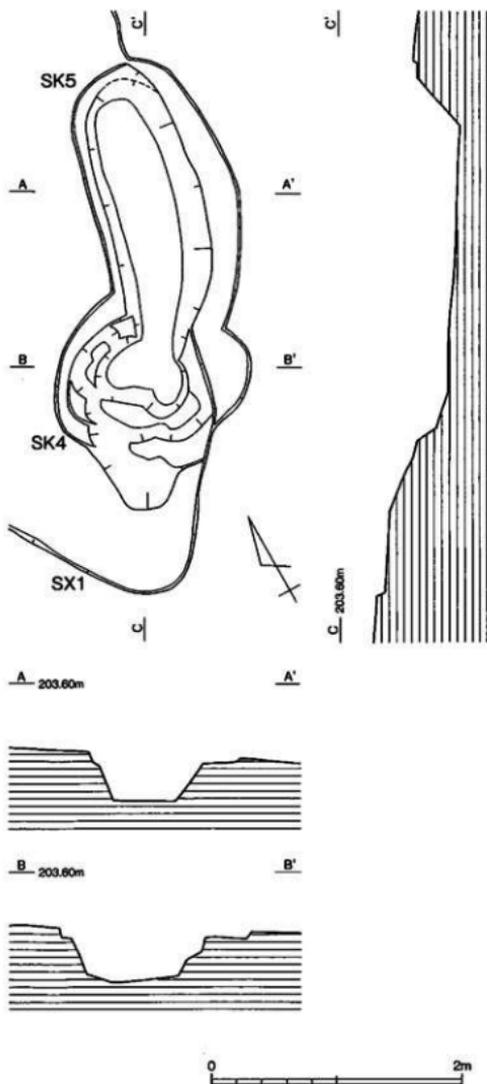
検出遺構 (第 11 図、図版 3 - c、4 - a、12 - a)

SB 3 の南西端に位置する土坑である。SB 3 と切り合い関係にあり、SK 3 の方が新しい。平面形は長円形であるが、南部が窪んでいる。長径 1.52 m × 短径約 1.27 m、深さ 0.36 ~ 0.5 m で、中央部がやや深くなっている。

出土遺物

遺物は出土していない。

(2) SK 4・5



第 28 図 SK 4・5 実測図 (1 : 40)

#### 検出遺構 (第 28 図)

SB 1 の北西 10.6 m, SB 9 の南東 5.9 m に位置する土坑である。SX 1 の南東端にあり、SX 1 とほぼ同時期の遺構と考えられる。2 つの土坑が重なっており、新旧関係は SK 4 より SK 5 の方が古い、時期差はそれほどないと思われる。SK 4 は不整円形で、長径約 1.7 m, 短径 1.61 m, 深さ 0.47 m であり、3 段に掘り込まれている。SK 5 は長円形で、長径約 2.2 m, 短径 0.87 m, 深さ 0.26 ~ 0.4 m で、西側は二段落ちになっている。2 基の土坑の底面のレベル差はほとんどない。壁面・底面はともに黄白色粘土で、周辺にも黄白色粘土が堆積していることから、粘土を採掘した痕跡の可能性が考えられる。

#### 出土遺物

遺物は出土していない。

### (3) SK 6

#### 検出遺構 (第 29 図)

SB 1 の南西 8.2 m, SB 2 の北西 6.7 m に位置する土坑である。平面形は長円形で、長径 1.75 m, 短径 0.72 m で、北東部に比べ南西部が広がっている。4 段に掘り込まれており、最深部の深さ 0.61 m である。壁面・底面はともに白色粘土で、周辺にも白色粘土が堆積していることから、粘土を採掘した痕跡の可能性が考えられる。

#### 出土遺物

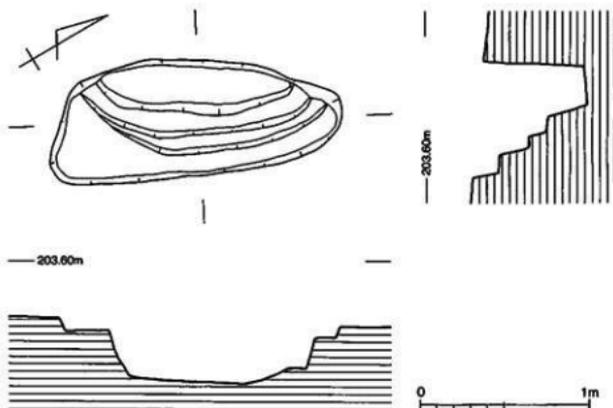
遺物は出土していない。

### (4) SK 7

#### 検出遺構 (第 30 図,

図版 12 - b)

SB 1 の南東 2.55 m, SB 2 の北東 3.85 m, SB 3 の南西 3.35 m, SB 4 の北西 5.15 m に位置し、4 軒の竪穴住居跡の間にある土坑である。平面形はほぼ円形で、長径 1.3 m, 短径 1.25 m, 深さ 0.36 m である。南東部は二段落ちになっ



第 29 図 SK 6 実測図 (1:30)

ている。断面は基本的には楕円状であるが、底面には径0.04～0.29 mの窪みが多く存在する。これらの窪みは遺構に伴うものではなく、木根の痕跡の可能性も考えられる。肩部に2か所、小範囲ではあるが熱を受けて赤変した部分が見られる。覆土は基本的には黒褐色土で、炭化物を多く含む。

#### 出土遺物

遺物は出土していない。

## 6 その他の遺構

### (1) SX1

#### 検出遺構 (第4図)

SB7の南西、SB9の南東に位置する不整形の落込みである。規模は南北方向7.9 m、東西方向4.6 m、深さ0.01～0.08 mであり、全体的に浅い。北側は不明瞭となるが、本来はSX2と連結していたと考えられる。南東端にSK4・5があり、粘土を採掘した跡と考えられることから、この落込みも粘土を採掘した跡の可能性が考えられる。

#### 出土遺物

遺物は出土していない。

### (2) SX2

#### 検出遺構 (第5図, 図版9-a・b)

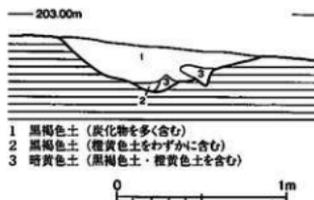
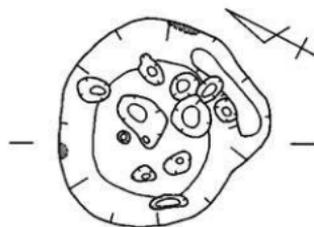
SB7の南西に位置する不整形の落込みで、南部でSX1と連結していたと考えられる。SB7とは切り合い関係にあり、SB7の方が新しい。規模は南北方向7.05 m、東西方向4.15 m、深さ0.01～0.28 mである。南東部は長さ3.25 m、幅0.65～0.9 mの溝状に掘っており、周囲より0.01～0.07 m深くなっている。また、中央西寄りには長径2.4 m、短径1.63 mの長円形に掘り込まれており、周囲より0.02～0.18 m深くなっている。SX1と同じく、この落込みも粘土を採掘した跡の可能性が考えられる。

#### 出土遺物

遺物は出土していない。

### (3) SX3

#### 検出遺構 (第22図, 図版6-c, 7-b)



第30図 SK7実測図 (1:30) (アミ目は焼土範囲)

SB6の東に位置する方形の遺構である。SA1・SB6・SD9とは切り合い関係にある。SA1・SB6より古いが、SD9との新旧関係は不明である。竪穴住居状を呈するが、柱穴に相当するものは確認されていない。南北方向の方位はN8°Eを指し、SA1・SB6とずれている。規模は南北方向が西側3.7m、東側4.5mである。東側は調査区外となっており、東西方向は北壁が現状で2.6m、南壁が約2.8m残存している。正方形ではなく、南壁は直角よりも広くなっている。壁高は最も残りの良い西壁で25cm、北壁で5cm、南壁で13cmである。底面はほぼ平らであるが、東側に向かって次第に低くなる。なお、東側には長さ83cm、幅44cmの範囲に焼土が集中している。

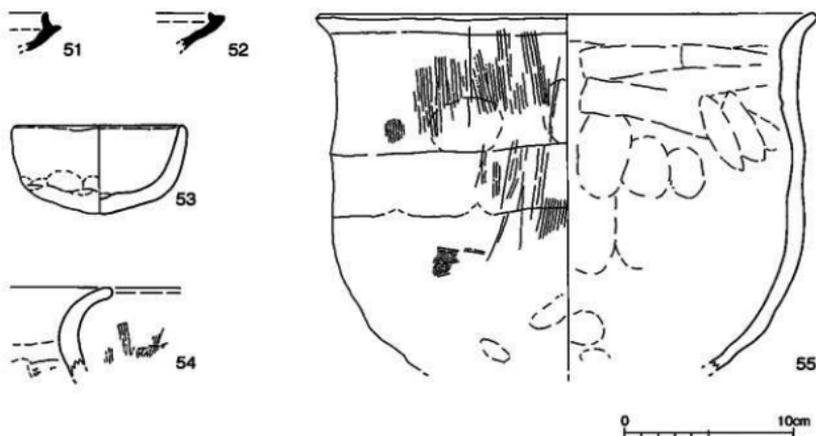
#### 出土遺物 (第31図、図版16)

須恵器杯身、土師器小型碗・甕が出土した。なお、本遺構出土の土師器甕片とSX4出土の土師器甕(74)が接合したが、詳細はSX4の項に記載した。

51・52は須恵器杯身である。51のたちあがり部は内湾気味に立ち上がり、受部は水平に伸びている。全体に回転ナデを施す。52のたちあがり部は短く内傾して立ち上がり、受部はやや上方に伸びている。底部は残存していないが、全体に回転ナデを施す。

53は土師器小型碗である。底部は丸みもち、体部との境でカーブが急になり、口縁部にかけて内湾気味に立ち上がる。口縁部はヨコナデ、底部内面はナデ、体部外面下部に指頭圧痕が残るが、底部外面の調整は不明である。復元口径9.8cm、器高5.3cmである。

54・55は土師器甕である。54の口縁部はカーブを描きながら外反し、端部は丸くおさめる。口頸部はヨコナデで、胴部内面はヘラケズリ、外面は縦方向のハケ目である。55は口縁部が短く緩やかに外反し、胴部がやや膨らんでいる。口頸部はヨコナデで、胴部上部内面はヘラケズリ後ナ



第31図 SX3出土遺物実測図(1:3)

デと思われ、中位以下に指頭圧痕が残る。胴部外面は全体に指頭圧痕が残り、上部から中位にかけて縦方向のハケ目がみられる。なお、外面には煤が付着している。復元口径は29.0 cmである。口径に比べると器高が低いタイプである。

その他、須恵器甕、暗文土師器が出土しているが、細片のため図示できなかった。暗文土師器は破片が2点出土しており、椀と推定される。

#### (4) SX4

##### 検出遺構 (第32図, 図版8-a・b・c)

SB6とSB7の間に位置する大規模な土坑状の遺構である。SB6からの距離は0.3 m、SB7からの距離は0.35 mであり、掘立柱建物跡に近接している。北西端はSD6とつながる。東端が不明瞭であるが、平面形は基本的には長円形である。南西が膨らんでおり、2基の土坑が重なったような形である。東西方向約4.55 m、南北方向が東側で1.97 m、西側で2.90 m、深さは東側が0.26 m、西側が0.56 mである。西側底部には長円形に淡黄色粘質土が貼られており、その範囲は長径2.15 m×短径1.4 mである。その粘質土を取り除くと、最深部で0.74 mになる。北東部において1.15 m×1.0 mの範囲に焼土と炭化物が集中する部分が見られる。その厚さは最大で23 cmある。この中央北部に20 cm大の石がある。なお、小さい窪みが北部に3、西部に1存在するが遺構に伴うものではなく、木根の痕跡の可能性はある。

本遺構から多量の土器が出土した。なかでも北東部の焼土・炭化物集中範囲付近で土器がまとめて出土する土器集中箇所が見られた。西部からも土器は出土しているが、東部に比べると出土量は少ない。

本遺構はSB6の南端を画する施設でもあるが、用途はそれだけではないと思われる。遺構の性格を特定することはできないが、後述するように出土遺物からも注目される遺構である。

##### 出土遺物 (第33・34図, 図版17~19)

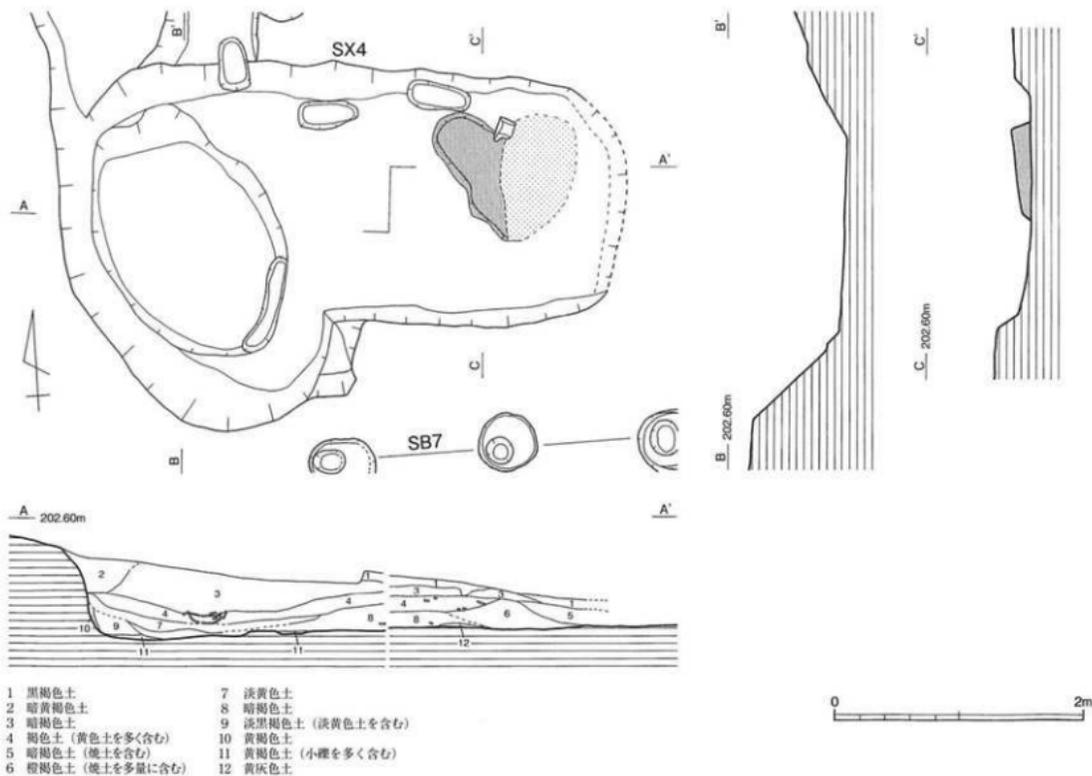
須恵器杯蓋・杯身・高杯、暗文土師器椀、土師器小型椀・鍋・甕・甌が出土した。なかでも甌・甕などの炊飯具が多数出土した。本遺構の出土土器の中には、SD6出土土器、SX3出土土器と接合するものもある。

56は須恵器杯蓋である。天井部から口縁部にかけて緩やかにカーブして下がり、口縁端部はやや外反気味に終る。全体に回転ナデを施す。復元口径は15.0 cmである。

57は土器集中箇所から出土した須恵器杯身である。底部は平坦でなく、丸みをもつと推定される。口縁部まで緩やかなカーブを描き、端部はやや尖り気味におさめている。底部は内外面ともナデと思われる。その他の部位は回転ナデである。復元口径は10.6 cmと小さいが、器壁は厚い。

58は土器集中箇所から出土した須恵器高杯脚部である。脚部はラッパ状に大きく開いている。脚端部は下方に屈曲させて、面を作り出している。全体に回転ナデを施す。復元底径は8.6 cmである。焼成は不良で、灰白色を呈す。

59は土器集中箇所から出土した暗文土師器椀である。底部から緩やかに内湾して立ち上がり、



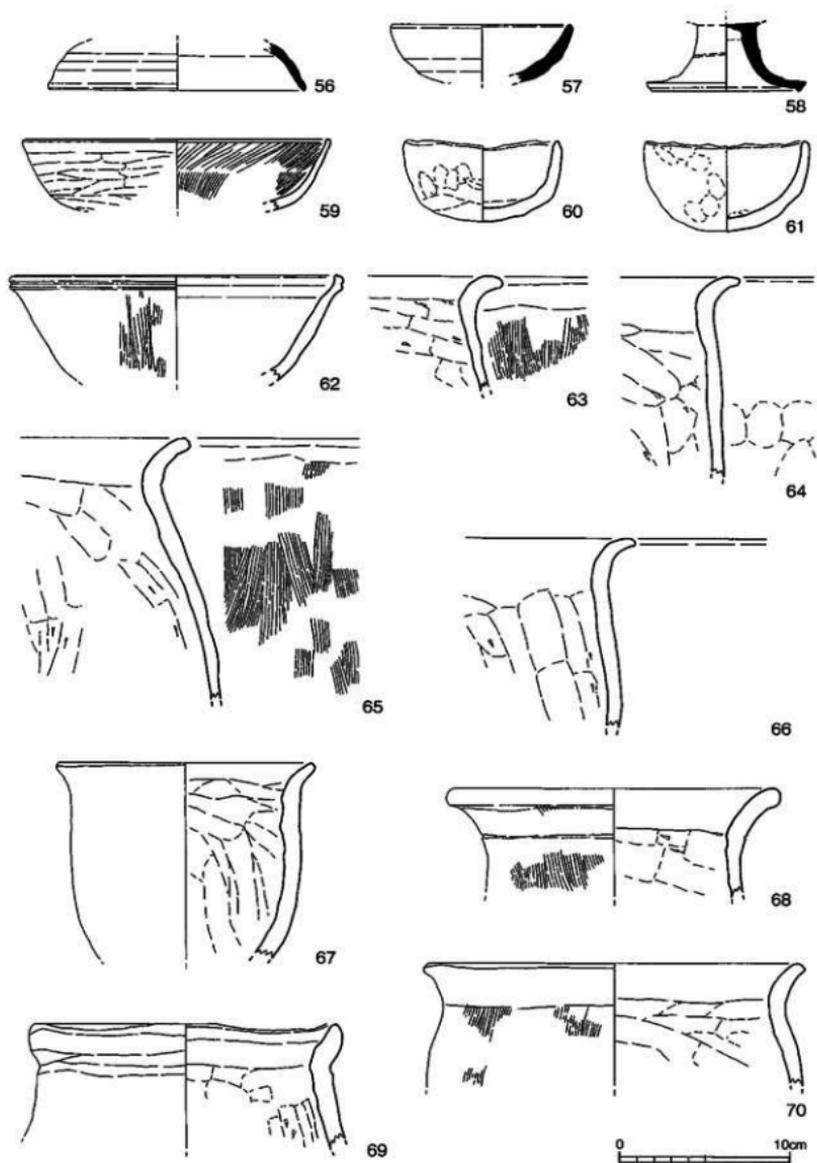
第32図 SX4実測図(1:40)(アミ目密は焼土。アミ目粗は炭化物範囲)

端部はやや内傾する。内面に上下2段にわたり放射暗文を施す。外面は横方向の細かいヘラミガキを施している。器壁は薄く丁寧に仕上げている。胎土は精良であり、黄褐色の胎土の上に内外面とも淡赤褐色の彩色がなされている。復元口径は17.9 cmである。

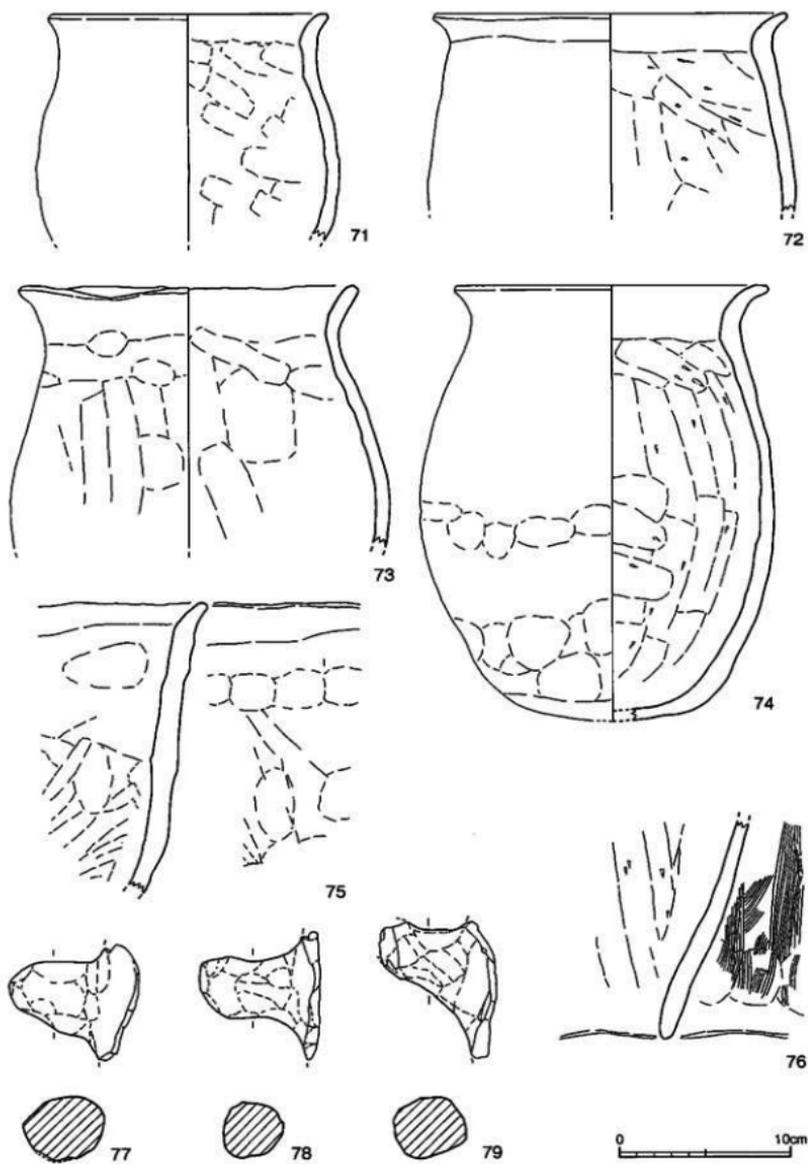
60・61は土師器碗である。60は焼土・炭化物集中部分から出土した。底部は丸みをもち、体部との境でカーブが急になり、口縁部にかけて内湾気味に立ち上がる。端部は尖り気味におさめる。口縁部はヨコナデ、底部は内外面ともナデ、体部外面に指頭圧痕も残るが、ナデを施している。口径9.0 cm、器高4.9 cmである。61は底部が丸く、体部から口縁部まで緩やかなカーブを描き、端部は丸くおさめる。全体の形はほぼ半球状を呈す。口縁部は横ナデ、底部内面はナデ、外面には指頭圧痕も残るが、ナデを施す。形にやや歪みがあり、口径9.1～9.3 cm、器高5.45 cmである。

62は土器集中箇所から出土した土師器鍋である。体部は斜め方向に直線的に伸び、口縁部は緩やかに外反し、端部付近で上方に立ち上がり、凹線が廻る。口縁部及び内面がヨコナデ、外面の一部にハケ目が残る。復元口径18.9 cmである。

63～74は土師器甕である。64・67・70・72は土器集中箇所から出土した。63は口縁部が短く強めに外反し、端部は丸くおさめる。胴部は若干膨らみ、頸部内面に稜をもつ。口頸部はヨコナデで、胴部内面はヘラケズリ、外面は縦方向のハケ目を施す。64は口縁部が短く強めに外反し、胴部はあまり膨らまない。口頸部はヨコナデで、胴部内面はヘラケズリ後ナデ、胴部外面の調整は不明であるが、指頭圧痕が残る部分もある。65はS D 6出土の破片と接合したものである。口縁部は短く外反し、胴部がやや膨らんでいる。口頸部はヨコナデで、胴部内面はヘラケズリにより器壁を薄くし、外面はハケ目である。66は口縁部が短く外反し、胴部はあまり膨らまない。口頸部はヨコナデで、胴部内面はヘラケズリ、外面の調整は不明である。67は口縁部が短く外反し、胴部は膨らまず、緩やかに内湾し、卵形を呈す。口縁部はヨコナデで、胴部内面は粗いナデ、胴部外面は摩滅のため調整は不明である。復元口径14.9 cmと小型であるが、大きさの割に器壁が厚い。68は口縁部がゆるやかに外反し、端部付近で強く外反する。胴部は膨らまない。口頸部はヨコナデで、胴部内面はヘラケズリで器壁を薄くし、外面はハケ目である。復元口径は18.8 cmである。69は口縁部が短く外反し、端部を丸くおさめる。胴部がやや膨らみ、胴部の器壁は厚い。口頸部はヨコナデで、胴部内面はヘラケズリであるが、頸部の下側はナデを施す。胴部外面の調整は不明である。復元口径17.8 cmである。70は口縁部が短く外反し、胴部はやや膨らんでいる。口頸部はヨコナデで、胴部内面はヘラケズリ後ナデを施し、外面にはかすかにハケ目が残る。復元口径は21.8 cmである。71は口縁部が短く外反し、胴部は中位で若干膨らむ。口頸部はヨコナデで、胴部内面はヘラケズリ、外面は摩滅のため調整は不明である。復元口径16.2 cmと小型である。72は口縁部が短く外反し、頸部内面に稜をもつ。胴部はわずかに膨らむ。口頸部はヨコナデで、胴部内面はヘラケズリ後ナデと思われる、外面の調整は不明である。復元口径は20.7 cmである。73は口縁部が緩やかに外反し、胴部がやや膨らんでいる。口頸部はヨコナデで、胴部内面はナデ、外面はヘラケズリ後ナデと思われる。口径は19.6 cmである。74は底部から胴部にかけての部位が



第33图 SX 4 出土物实测图 (1) (1:3)



第34图 SX4出土遺物実測図(2)(1:3)

主にSX3、胴部から口縁部にかけての部位が主にSX4から出土した。形は左右対称ではなく、歪みがあり、胴部は膨らみが強い部分とあまり膨らみがない部分がみられる。しかし、全体的には胴部はあまり張らずに長胴形を呈している。口縁部は短く外反し、口縁端部付近で外反が強まる箇所もある。体部と底部の境は明瞭であるが、底部はやや丸味をおびる。口頸部はヨコナデで、胴部から底部にかけての内面はヘラケズリして器壁を薄くし、頸部内面に稜をもつ。外面は胴部中位や下部に指頭圧痕が残る部分もあるが、全体的に調整は不明瞭である。外面に煤が付着している。復元口径 18.2 cm, 復元器高 26.1 cm である。

75・76 は土師器甌である。75 は土器集中箇所から出土した。口縁部は器壁を次第に薄くしながら短く外反し、端部を丸くおさめる。体部は緩やかなカーブで頸部から下方に続き、下部で内湾する。口縁部がヨコナデで、体部外面上部に指頭圧痕が残り、外面中位以下及び内面がヘラケズリ後ナデと思われる。外面下部に煤が付着している。76 は甌の下部である。体部はやや内湾しながら斜め上方に伸びている。下端部はヨコナデを施し、丸くおさめている。体部内面はヘラケズリ、外面はハケ目である。

77～79 は土師器甌の把手と考えられる。77 は水平方向に伸び、断面は楕円形に近い。78 は水平方向に伸びるが、中央がやや細くなっている。断面は円形に近い。79 は上方にわずかに湾曲し、先端部を欠損している。断面はややいびつな楕円形である。

その他、須恵器甕・平瓶、すざが入ったカマド片が出土しているが、細片のため図示できなかった。また、鉄片と鉄滓（2点、計 37.5 g）が少量出土した。

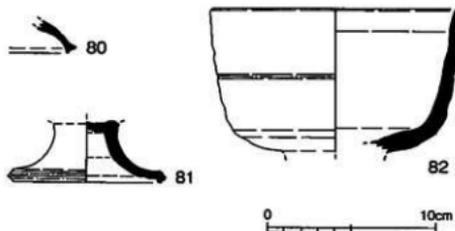
## 7 調査区内出土遺物（第35図、図版19）

80 はSB6の北東に位置するピットから出土したかえりのある須恵器杯蓋である。口縁部しか残存していないため、つまみの有無は不明である。かえりと受部が共に小さい。全体に回転ナデを施す。

81 は表土から出土した須恵器高杯脚部である。脚部はラッパ状に大きく開いている。脚端部は下方に屈曲させ、面を作り出している。全体に回転ナデを施す。底径は 8.7 cm である。焼成は不良で、灰白色を呈す。

82 は表土から出土した須恵器台付椀である。椀に短い台部が付くと思われるが、台部は欠損している。椀部は体部から口縁部にかけてやや外傾して立ち上がり、端部を丸くおさめる。体部中位に1条の沈線が廻る。復元口径は 14.5 m, 椀部の高さは 8.6 cm である。

その他、表土から土師器甕・甌が出土しているが、細片のため図示できなかった。



第35図 調査区内出土遺物実測図 (1:3)

第2表 出土土器観察表 1

遺物番号	出土遺物	種別・器種	計測値	調整	色調	胎土	備考
1	須恵器・杯蓋			外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	外面：暗青灰色 内面：淡青灰色	精緻	かえり無
2	須恵器・杯蓋			外面：天井部-ヘラケズリ後ナデ、その他-回転ナデ 内面：回転ナデ	灰白色	細砂を含む	かえり有 焼成やや不良
3	須恵器・杯身			外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	外面：暗灰色 内面：灰色	砂粒を含む	かえり有
4	須恵器・杯身			外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	外面：青灰色 内面：淡灰色	砂粒を多く含む	かえり有 外面に自然釉がかかる
5	須恵器・杯身	復元口径：13.3cm 復元器高：3.2cm		外面：底部-ヘラケズリ、その他-回転ナデ 内面：回転ナデ	外面：淡青灰色 内面：灰色	細砂を含む	かえり有
6	土師器・甕			外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	淡茶色	細砂を含む	外面に黒炭有
7	土師器・甕			外面：胴部-ハケ目、口頸部-ヨコナデ 内面：胴部-ヘラケズリ、口頸部-ヨコナデ	淡橙黄色	砂粒を含む	
8	土師器・甕	復元口径：13.1cm		外面：胴部-不明、口頸部-ヨコナデ 内面：胴部-指頭圧痕、口頸部-ヨコナデ	黄褐色	細砂を含む	小型の甕
9	土師器・甕	復元口径：19.4cm		外面：口頸部-ヨコナデ 内面：胴部-ヘラケズリ、口頸部-ヨコナデ	淡橙褐色	砂粒を多く含む	
10	須恵器・杯蓋	復元口径：13.2cm 復元器高：3.8cm		外面：天井部-不明、その他-回転ナデ 内面：回転ナデ	外面：灰色 内面：淡灰褐色	細砂を含む	かえり無 外面全体に緑褐色の自然釉
11	須恵器・杯蓋	復元口径：13.4cm 復元器高：3.9cm		外面：天井部-ヘラ切り、その他-回転ナデ 内面：回転ナデ	淡茶灰色	砂粒を含む	かえり無
12	須恵器・杯身	復元口径：13.8cm		外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	淡青灰色	砂粒を多く含む	かえり有 外側一部が淡黒褐色（後に火熱を受けたためか?）
13	SB2 土師器・高杯（脚部）	底径：5.4cm		外面：胴部-ヘラミガキ、杯部-ナデ？ 内面：脚部-ナデ、脚端部-ヨコナデ、杯部-ナデ	底面：淡黒褐色 その他：暗褐色	砂粒を含む	小型の高杯 土製支脚（支脚型土器）の可能性有
14	SB2 土師器・甕	胴部最大径：22.0cm		外面：胴部-ハケ目 内面：胴部-ヘラケズリ、底部-不明	灰茶色	砂粒を含む	胴部外面全体に煤付着
16	SB3 須恵器・杯蓋			外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	青灰色	細砂を含む	
17	SB3 須恵器・高杯（脚部）			外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	外面：黒褐色 内面：淡茶灰色	細砂を含む	外面に自然釉がかかる
18	SB3 土師器・甕	復元口径：9.4cm		外面：胴部-不明、口頸部-ヨコナデ 内面：胴部-ヘラケズリ、口頸部-ヨコナデ	淡赤褐色	精緻	小型の甕 胴部外面に煤付着
19	SB3 土師器・甕	復元口径：10.3cm		外面：不明 内面：不明	外面：橙褐色 内面：淡橙褐色	細砂を含む	小型の甕 焼成やや不良 全体的に煤着が著しい
20	SB3 土師器・甕			外面：胴部-粗いハケ目、口縁部-ヨコナデ 内面：胴部-ハケ目か？、口縁部-ヨコナデ	淡橙褐色	細砂を含む	胴部外面に煤付着
21	SB4 須恵器・杯蓋			外面：天井部-ヘラ切り、その他-回転ナデ 内面：回転ナデ	灰色	細砂を含む	かえり無
22	SB4 須恵器・杯蓋	復元口径：13.1cm 復元器高：4.1cm		外面：天井部-ヘラ切り後ナデ、その他-回転ナデ 内面：天井部-ナデ、その他-回転ナデ	外面：青灰色 内面：暗青灰色	細砂を含む	かえり無 焼成やや不良
23	SB4 須恵器・杯身			外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	外面：灰褐色 内面：淡青灰色	精緻	かえり有 外面に薄く自然釉がかかる
24	SB4 土師器・甕			外面：口頸部-ヨコナデ 内面：胴部-ヘラケズリ、口頸部-ヨコナデ	外面：淡橙褐色 内面：淡黄褐色	精緻	小型の甕 焼成やや不良
25	SB4 土師器・甕			外面：胴部-ハケ目、口頸部-ヨコナデ 内面：胴部-ヘラケズリ、口頸部-ヨコナデ	外面：淡橙褐色 内面：淡黄褐色	砂粒を多く含む	
26	SB4 土師器・瓶（把手）			外面：ナデ 内面：ヘラケズリ	淡黄褐色	砂粒を含む	断面は楕円形
28	SD2 須恵器・杯蓋	復元口径：12.4cm 器高：3.6cm		外面：天井部-ヘラ切り後ナデ、その他-回転ナデ 内面：天井部-ナデ、その他-回転ナデ	灰白色	細砂を含む	かえり無 焼成不良
29	SD2 土師器・甕			外面：口頸部-ヨコナデ 内面：胴部-ヘラケズリ、口頸部-ヨコナデ	外面：灰白色 内面：淡青灰色	細砂を多く含む	
30	SD3 須恵器・高杯	復元底径：10.3cm		外面：回転ナデ 内面：胴部-回転ナデ、杯部-ナデ	淡青灰色	精緻	焼成不良
31	SD3 土師器・手づくね輪	復元口径：5.9cm 器高：4.7cm		外面：指頭による整形後ナデ 内面：指頭圧痕	外面：黄灰色 内面：淡褐色	砂粒を多く含む	
32	SD3 土師器・甕	復元口径：21.0cm		外面：体部-不明、口縁部-ヨコナデ 内面：胴部-ヘラケズリ、胴部-ハケ目？	外面：淡赤褐色 内面：黄褐色	細砂を多く含む	
33	SD3 土師器・瓶			外面：体部-粗いハケ目、口縁部-ヨコナデ 内面：体部-粗いハケ目、口縁部-ヨコナデ、ヘラケズリ後ヨコナデ？（上部）、ヘラケズリ	外面：淡黄褐色 内面：淡黄褐色	砂粒を多く含む	内外面とも黒炭有

第3表 出土土器観察表 2

遺物番号	出土遺構	種別・器種	計測値	調査	色調	胎土	備考
34	SD3	土師器・甗	復元口径: 22.2cm	外面: 指頭による整形後ナデ(上部)、ハケ目 内面: 体部-ヘラケズリ, 口縁部-ヨコナデ	外面: 淡赤褐色 内面: 赤褐色	砂粒を多く含む	把手がつく 内外面とも黒斑有
35	SD3	土師器・甗(把手)		外面: ナデ 内面: ヘラケズリ	外面: 淡橙褐色 内面: 淡黄灰色	砂粒を多く含む	断面はいびつな円形
36	SD5	須恵器・杯身		外面: 回転ナデ 内面: 回転ナデ	外面: 灰色 内面: 淡青灰色	砂粒を含む	かえり有
37	SD5	須恵器・高杯	復元口径: 14.1cm 復元底径: 9.8cm 復元器高: 8.6cm	外面: 回転ナデ 内面: 底部-仕上げナデ, その他-回転ナデ	淡青灰色	砂粒を含む	かえり無
38	SD5	土師器・甗	復元口径: 10.0cm 器高: 3.7cm	外面: 体部-指頭圧痕(上部)、ハケ目 内面: 底部-指頭圧痕, その他-ヨコナデ	外面: 黄褐色 内面: 淡橙褐色	粗砂を多く含む	外面に黒斑有 須恵器杯身を模したのか?
39	SD5	土師器・甗		外面: 胴部-ハケ目, 口頸部-ヨコナデ 内面: 胴部-ヘラケズリ, 口頸部-ヨコナデ	淡灰褐色	細砂を多く含む	内外面とも黒斑有
40	SD6	須恵器・杯身	復元口径: 9.7cm 器高: 3.25cm	外面: 底部-ナデ, その他-回転ナデ 内面: 底部-ナデ, その他-回転ナデ	乳白色	細砂を含む	焼成不良
41	SD6	須恵器・高杯	復元底径: 9.0cm	外面: 回転ナデ 内面: 杯部-仕上げナデ, 脚部-回転ナデ	外面: 青灰色 内面: 淡青灰色	砂粒を含む	
42	SD6	土師器・甗	口径: 8.4 ~ 9.0cm 器高: 4.75cm	外面: 指頭圧痕 内面: 指頭による形成後ナデ	外面: 淡黒褐色 内面: 淡褐色	細砂を含む	小型の甗形にやや歪み有
43	SD6	土師器・甗		外面: 胴部-不明, 口頸部-ヨコナデ 内面: 胴部-ヘラケズリ, 口頸部-ヨコナデ	外面: 淡米灰色 内面: 淡褐色	砂粒を含む	胴部内面に稜有 外面に黒斑有
44	SD6	土師器・甗		外面: 胴部-ハケ目, 口頸部-ヨコナデ 内面: 胴部-ヘラケズリ後ナデ, 口頸部-ヨコナデ	外面: 淡黄灰色 内面: 灰褐色	砂粒を含む	
45	SD6	土師器・甗	復元口径: 18.2cm	外面: 胴部-ハケ目, 口頸部-ヨコナデ 内面: 胴部-ヘラケズリ, 口頸部-ヨコナデ	外面: 淡赤褐色 内面: 褐色	砂粒を多く含む	内外面とも黒斑多し
46	SD6	土師器・甗	復元口径: 27.4cm	外面: 胴部-ナデ, 口頸部-ヨコナデ 内面: 胴部-ヘラケズリ, 口頸部-ヨコナデ	外面: 淡褐色 内面: 灰褐色	砂粒を多く含む	
47	SD6	土師器・甗(把手)		外面: ナデ 内面: ヘラケズリ	外面: 黄褐色 内面: 淡灰褐色	砂粒を多く含む	断面は円形に近い
48	SD7	須恵器・杯身	復元口径: 9.6cm 復元器高: 3.75cm	外面: 底部-ナデ? その他-回転ナデ 内面: 底部-ナデ, その他-回転ナデ	淡灰白色	砂粒を多く含む	焼成不良
49	SD7	土師器・甗		外面: 胴部-ナデ? 口頸部-ヨコナデ 内面: 胴部-ヘラケズリ?, 口頸部-ヨコナデ	淡黄褐色	砂粒を含む	
50	SD7	土師器・甗		外面: 体部-ハケ目, 握手-ナデ, 口縁部-ヨコナデ 内面: 体部-ヘラケズリ, 口縁部-ヨコナデ	橙褐色	砂粒を多く含む	体部に把手がつく
51	SX3	須恵器・杯身		外面: 回転ナデ 内面: 回転ナデ	暗灰色	砂粒を含む	かえり有
52	SX3	須恵器・杯身		外面: 回転ナデ 内面: 回転ナデ	外面: 黒灰色 内面: 暗灰色	細砂を含む	かえり有
53	SX3	土師器・甗	復元口径: 9.8cm 器高: 5.3cm	外面: 底部-不明, 体部-指頭圧痕, 口縁部-ヨコナデ 内面: 底部-ナデ, その他-ヨコナデ	外面: 淡黄灰色 内面: 黄灰色	砂粒を含む	小型の甗 内外面に黒斑有
54	SX3	土師器・甗		外面: 胴部-ハケ目, 口頸部-ヨコナデ 内面: 胴部-ヘラケズリ, 口頸部-ヨコナデ	外面: 淡赤褐色 内面: 淡紫色	砂粒を多く含む	
55	SX3	土師器・甗	復元口径: 29.0cm	外面: 胴部-指頭圧痕・ハケ目, 口頸部-ヨコナデ 内面: 胴部-指頭圧痕・ヘラケズリ後ナデ	淡橙褐色	砂粒を含む	外面に煤付着
56	SX4	須恵器・杯蓋	復元口径: 15.0cm	外面: 回転ナデ 内面: 回転ナデ	外面: 暗青灰色 内面: 淡青灰色	細砂を含む	
57	SX4	須恵器・杯身	復元口径: 10.6cm	外面: 底部-ナデ, その他-回転ナデ 内面: 底部-ナデ, その他-回転ナデ	外面: 暗灰白色 内面: 灰白色	細砂を含む	焼成不良
58	SX4	須恵器・高杯(脚部)	復元底径: 8.6cm	外面: 回転ナデ 内面: 回転ナデ	灰白色	細砂を含む	焼成不良
59	SX4	陶文土師器・甗	復元口径: 17.9cm	外面: 体部-ヘラミガキ, 口縁部-ヨコナデ 内面: 2段の放射暗文	胎土は黄褐色 淡赤褐色に彩色	細砂を含む	
60	SX4	土師器・甗	口径: 9.0cm 器高: 4.9cm	外面: 口縁部-ヨコナデ, その他-ナデ(体部に指頭圧痕) 内面: 底部-ナデ, 体部-ヨコナデ	淡黄褐色	細砂を含む	内外面とも一部黒斑有
61	SX4	土師器・甗	口径: 9.1 ~ 9.3cm 器高: 5.45cm	外面: 口縁部-ヨコナデ, その他-ナデ(指頭圧痕) 内面: 底部-ナデ, 体部-ヨコナデ	外面: 淡黒褐色 内面: 淡赤褐色	細砂を含む	外面の一部赤褐色 形にやや歪み有
62	SX4	土師器・甗	復元口径: 18.9cm	外面: 体部-ハケ目, 口縁部-ヨコナデ 内面: ヨコナデ	淡褐色	砂粒を含む	口縁部下側に凹線
63	SX4	土師器・甗		外面: 胴部-ハケ目, 口頸部-ヨコナデ 内面: 胴部-ヘラケズリ, 口頸部-ヨコナデ	外面: 淡橙褐色 内面: 灰褐色	砂粒を多く含む	胴部内面に稜有

第4表 出土土器観察表3

遺物番号	出土遺構	種別・器種	計測値	調整	色調	胎土	備考
64	SX4	土師器・甕		外面：胴部-不明・指頭圧痕，口頸部-ヨコナデ 内面：胴部-ヘラケズリ後ナデ，口頸部-ヨコナデ	外面：橙褐色 内面：淡橙褐色	砂粒を含む	
65	SX4	土師器・甕		外面：胴部-ハケ目，口頸部-ヨコナデ 内面：胴部-ヘラケズリ，口頸部-ヨコナデ	淡褐色（外面） 淡黒褐色（内面）	粗砂を含む	SD6出土破片と接合
66	SX4	土師器・甕		外面：胴部-不明，口頸部-ヨコナデ 内面：胴部-ヘラケズリ，口頸部-ヨコナデ	外面：淡褐色 内面：淡黄褐色	細砂を多く含む	外面の一部煤付着 焼成やや不良
67	SX4	土師器・甕	復元口径：14.9cm	外面：不明 内面：胴部-粗いナデ，口頸部-ヨコナデ	外面：淡赤褐色 内面：淡褐色	砂粒を多く含む	小型の甕
68	SX4	土師器・甕	復元口径：18.8cm	外面：胴部-ハケ目，口頸部-ヨコナデ 内面：胴部-ヘラケズリ，口頸部-ヨコナデ	外面：淡黄褐色 内面：淡黄灰色	細砂を含む	外面に煤付着 内外面とも黒炭有
69	SX4	土師器・甕	復元口径：17.8cm	外面：体部-不明，口頸部-ヨコナデ 内面：胴部-ヘラケズリ，頸部下側-ヘラケズリ後ナデ	外面：橙褐色 内面：淡橙褐色	砂粒を含む	
70	SX4	土師器・甕	復元口径：21.8cm	外面：胴部-ハケ目，口頸部-ヨコナデ 内面：胴部-ヘラケズリ後ナデ，口頸部-ヨコナデ	淡橙褐色	粗砂を多く含む	
71	SX4	土師器・甕	復元口径：16.2cm	外面：胴部-不明，口頸部-ヨコナデ 内面：胴部-ヘラケズリ，口頸部-ヨコナデ	外面：淡赤褐色 内面：淡橙褐色	砂粒を多く含む	小型の甕
72	SX4	土師器・甕	復元口径：20.7cm	外面：胴部-不明，口頸部-ヨコナデ 内面：胴部-ヘラケズリ後ナデ？，口頸部-ヨコナデ	外面：淡黄褐色 内面：淡黄灰色	砂粒を多く含む	胴部内面に煤有
73	SX4	土師器・甕	復元口径：19.6cm	外面：胴部-ヘラケズリ後ナデ？，口頸部-ヨコナデ 内面：胴部-ナデ，口頸部-ヨコナデ	淡橙褐色	砂粒を多く含む	口縁部周辺に黒炭有
74	SX4	土師器・甕	復元口径：18.2cm 復元器高：26.1cm	外面：胴部-不明・指頭圧痕，口頸部-ヨコナデ 内面：胴部-底部-ヘラケズリ，口頸部-ヨコナデ	外面：淡赤褐色 内面：淡褐色	砂粒を多く含む	SX3出土破片と接合 外面に煤付着
75	SX4	土師器・甕		外面：体部-指頭圧痕（上部），ヘラケズリ後ナデ 内面：体部-ヘラケズリ後ナデ？，口縁部-ヨコナデ	淡赤褐色	粗砂を多く含む	外面下部に煤付着
76	SX4	土師器・甕		外面：体部-ハケ目，下部部-ヨコナデ 内面：体部-ヘラケズリ，下部部-ヨコナデ	外面：橙灰色 内面：橙褐色	細砂を多く含む	内面全体に煤付着
77	SX4	土師器・甕 （把手）		外面：ナデ 内面：ヘラケズリ	外面：淡褐色 内面：淡青灰色	砂粒が多い	断面は楕円形に近い
78	SX4	土師器・甕 （把手）		外面：ナデ 内面：ヘラケズリ	外面：淡灰褐色 内面：黄灰色	細砂を含む	断面は円形に近い 焼成やや不良
79	SX4	土師器・甕 （把手）		外面：ナデ 内面：ヘラケズリ	外面：橙灰色 内面：橙褐色	粗砂を多く含む	断面はいびつな楕円形
80	調査区 ピット	須恵器・杯蓋		外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	灰白色	細砂を含む	かえり有 焼成やや不良
81	表土	須恵器・高杯（脚部）	底径：8.7cm	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	灰白色	砂粒を含む	体部中央に1条の沈線
82	表土	須恵器・台付甕	復元口径：14.5cm 胴部高：8.6cm	外面：底部-ヘラケズリ後ナデ，その他-回転ナデ 内面：回転ナデ	外面：淡灰褐色 内面：灰褐色	砂粒を含む	

第5表 出土土製品計測表

遺物番号	出土遺構	種別	長さ	幅	厚さ	重量	備考
15	SB2	砥石	9.75 cm	6.2 cm	3.2 cm	253.5 g	凝灰岩？
27	SB4	砥石	10.6 cm	6.1 cm	4.6 cm	377.4 g	凝灰岩？

## V まとめ

向江田山中遺跡は、竪穴住居跡と掘立柱建物跡を中心とする古墳時代末～古代の集落跡である。しかし、一般的集落とは異なる点もあり、ここでは調査成果を整理して、本遺跡の性格について若干の考察を行い、まとめとしたい。

### (1) 竪穴住居跡について

調査区南側で検出した4軒の竪穴住居跡は、いずれも平面形は方形で、一辺5.4～6.9mの規模である。床面は黄色土で造成(貼床)しており、4本柱で柱穴に径18～22cmの円形の柱痕跡が認められる。4軒のうちSB1・3・4の壁際には、カマドが築かれている。また、SB1とSB3は、建て替えが行われ、建物の拡張が行われている。

SB1出土の須恵器杯身(5)は、器高が低く扁平で、たちあがり部が短く内傾し、SB4出土の須恵器杯蓋(22)の口縁部は天井部から垂直に屈曲しており、陶邑Ⅱ型式5段階<sup>(1)</sup>、TK209型式に比定される。また、SB4出土の須恵器杯身(23)はたちあがり部が高く、直線的に立ち上がりしており、陶邑Ⅱ型式4段階、TK43型式に比定され、他の須恵器に比べて古い形態を示している。SB1・4は6世紀第4四半期から7世紀初頭に造られた可能性があるが、それ以外の須恵器は陶邑Ⅱ型式6段階、TK217型式に比定されるものが中心で、SB2・3は、出土遺物から7世紀前半を中心とする遺構と思われる。

これらの竪穴住居跡は、当時としては一般的な住居跡であり、特筆すべき遺物は出土していない。4軒の竪穴住居跡は、近接して建てられており、密接な関係があったことが想像できる。SB1・2からそれぞれ出土した須恵器高杯脚の破片が接合したことは、それを裏付けるものである。

調査区北側で検出したSX3は、方形に掘り込んでおり、竪穴住居状を呈している。壁高は最も残りがよい部分で25cmである。規模は南北方向が西側3.7m、東側4.5mで、東西方向は北壁が現状で2.6m、南壁が約2.8m残存している。底面はほぼ平らで、東側に焼土集中部分があり、炉跡の可能性はある。柱穴は確認されていないが、本遺構は竪穴住居跡であった可能性が考えられる。SB6と切り合い関係にあり、本遺構の方が古い。本遺構出土の須恵器杯身(51)はたちあがり部が比較的高く、陶邑Ⅱ型式4段階、TK43型式に比定される。SB6に伴うと考えられるSD5出土の須恵器杯身(36)より古い形態を示している。

### (2) 掘立柱建物跡について

調査区中央部から北部にかけて検出した6棟の掘立柱建物跡は、注目される遺構である。建物跡の規模は、SB5が2間以上×3間以上、SB6が2間×3間、SB7が2間×3間の総柱、SB8が2間×3間、SB9が1間×2間以上、SB10が1間以上×2間以上である。

SB8は柱位置が不揃いで、いびつな平面形をしているが、その他の建物跡はきれいな方形で、

柱穴は計画的に配置されており、建物方位はほぼ真北ないし、その直角方向を示す。SB5～7は南北方向に一直線に並んでいる。SB5・6は同一の平坦面を造成し、建物を取り囲むように溝を配置して区画していることから、中心的な建物であった可能性が考えられる。SB5の規模は、現状で桁行方向5.8m、梁行方向3.7mで、平均柱間距離は桁行方向1.93m、梁行方向1.85mである。柱穴は方形に近い円形または楕円形で、径40～60cmのものが多く、径約16cmの円形の柱痕跡が残るものもある。SB6の規模は桁行方向5.15m、梁行方向3.3mで、平均柱間距離は桁行方向1.72m、梁行方向1.65mである。柱穴は方形に近い円形または楕円形で、径40～55cmのものが中心であり、径約16cmの円形の柱痕跡が残るものもある。

SB7は総柱掘立柱建物跡で、高床倉庫と考えられる。規模は桁行方向7.3m、梁行方向2.75mで、平均柱間距離は桁行方向2.43m、梁行方向1.38mである。ほかの建物跡に比べ、桁行方向の柱間距離が長く、梁行方向の柱間距離が短い。柱穴は円形のものが多く、径約70cmと径約50cmの2つの大きさがあり、径16～25cmの円形の柱痕跡が残るものもある。

遺物は、掘立柱建物跡を区画する溝からの出土が中心で、須恵器・土師器と少量の鉄滓などがある。なかでも炊飯具である土師器甕・甔が多い。このことは、人々が住居として使用していた掘立柱建物があったことを物語るものと思われる。さらに、計画的な建物配置により建てられていることから、単に住居として使用されたものではないと思われる。遺物の時期、特に須恵器については、向田裕始氏の編年<sup>(3)</sup>では7世紀第2四半期に該当するとみられる。掘立柱建物と溝は一連のものであり、その時期は7世紀前半～中頃と考えられる。

### (3) SX4について

SB6の南端に伴うSX4は、東西約4.55m、南北2.0～2.9m、深さ0.6mの比較的大きい土坑状遺構である。あるいは、小規模な竪穴住居状遺構ともいえる。北東部の1.15m×1.02mの範囲に焼土と炭化物が集中しており、この中央北部に20cm大の石がある。これまでSX4については、東部にカマドがある巨大なカマド跡（竈屋）と報告されてきた<sup>(4)</sup>。土師器甕・甔などの炊飯具が多数出土している点、東部の焼土と炭化物が集中する部分がカマド跡で、その中央北部にある石がカマドの袖石の可能性があるという点などから推察されたものである。古代豪族居宅は、掘立柱建物を中心に構成されており、東日本では敷地内に竪穴建物1棟ないし数棟を伴う例が多いとされ、それらの竪穴建物は主屋あるいは竈屋と推定されている<sup>(5)</sup>。本遺跡のSX4については、その規模や形状から主屋とは考え難く、竈屋の可能性が考えられる。

しかし、本遺構をカマド跡とするには、火熱を受けて焼けた部分が少ない、また、建物跡に近すぎるという問題もある。そのため、カマド跡ではなく、割れた土器などを廃棄するための土坑の可能性も考えられる。さらに、本遺構は東側に比べ、西側が広く、深くなっていることから、1つの遺構ではなく、2基の土坑が結合している可能性もある。遺物の整理を進めるなかで、SX3出土の土師器甕の底部から胴部にかけての部位と、SX4出土の土師器甕の胴部から口縁部にかけての部位が接合し、一個体(74)となることが明らかとなった。このことによりSX3で

使用していた土器が破砕したため、あるいはSX3の役割が終了した段階で土器をSX4に廃棄した可能性が高まった。また、SX3とSX4から暗文土師器の椀が出土している点からも両遺構の関係が深いことが推察される。ただ、SD6出土の破片と接合したSX4出土土師器甕(65)も確認されていることから、SX4出土のすべての土器がSX3から廃棄されたものではなく、使用できなくなった土器を周辺の遺構から運んで廃棄したのではないかと考えられる。当初から破砕した土器を廃棄する目的で造られたものか、それともカマドなどほかの目的で造られたものが後に土器を廃棄するために再利用されたかは不明である。しかし、最終的に廃棄土坑として使用されたのは間違いない。

ただ、土師器甕・飯の出土量が多いことから、近くにカマドがあったものと思われる。本遺構が周辺の建物に居住する人々のための煮炊きを一括して行う大規模なカマド跡(竈屋)であった可能性も完全に否定することはできない。現時点で、この遺構の性格を断定することはできない。本遺構の性格として、①大規模なカマド跡であったものが、後に土器の廃棄のために使用されるようになった、②カマド跡ではなく、当初から廃棄土坑であった、③区画溝であったが、後に廃棄土坑になった、という3つの可能性を示すにとどめておく。

なお、SX4、SB5に伴うと考えられるSD3、SB6に伴うと考えられるSD5からそれぞれすさが入ったカマド片が出土しており、移動式カマドも使用されていたものと思われる。

#### (4) 暗文土師器について

SX3とSX4から暗文土師器が出土している。暗文土師器は出土量が少なく、日常生活に使用されたものではないことが知られている。広島県内出土の暗文土師器については、安間拓巳氏の研究<sup>(6)</sup>がある。安間氏によると、県内の暗文土師器出土遺跡は、古墳(墳墓)、官衙関連遺跡、集落遺跡の3つに区分でき、古墳(墳墓)が全体の半数以上を占めている。そして、暗文土師器が出土する古墳の大部分が、地域の有力者の墳墓である。また、暗文土師器出土の集落遺跡の多くは、鉄・鉄器生産に関係していたこと、及び畿内の影響を受け始めた時期に出土数が増加していることを指摘している。さらに、関広尚世氏は暗文土師器を含む畿内産土師器について、畿内産土師器と畿内系土師器に分類しており、畿内産土師器は「畿内で出土する土師器のように胎土や調整方法すべてにおいて精緻な作りをめざしたもので」、畿内系土師器は「ミガキ調整や丹を施すなどの在地系の土器には用いられない技法が単発で使われながらも、胎土や調整の総合的な品質が畿内出土の土師器のそれに追いつかない」ものとしている。

向江田中山遺跡のSX3からは暗文土師器の破片が2点出土しているが、小片のため図示していない。椀と思われるが、口縁部は残存しておらず、正確な器形は不明である。いずれも赤色の彩色をしたものではなく、胎土自体が赤褐色で、砂粒をほとんど含まない精良なものである。残存状態は良くないが、内面に暗文が認められる。SX4から出土した暗文土師器椀(59)は、椀A<sup>(8)</sup>として分類されているものである。胎土は精良で、黄褐色の胎土の上に赤色の彩色をしている。復元口径は17.9cmで、椀としては比較的大型である。底部は欠損しているが、体部内面に2段の

放射暗文をもつ。赤色の彩色をしていること、また、胎土や全体的なつくり方などから、在地で製作され、SX3出土のものよりも新しい可能性がある。このタイプの土器は、飛鳥Ⅲ段階ないしⅣ段階の可能性が高い。

ところで、遺跡の発掘調査や平城宮出土木簡などから舊後北部は古墳時代後期以降、鉄・鉄器生産が盛んであったことが知られている。しかし、本遺跡からの鉄器・鉄滓出土量は微量で、鉄・鉄器生産と関係していたとは断定できない。むしろ、水田耕作を基盤とした集落である可能性が高いと思われる。また、SX3とSX4から出土した土器の時期差から、本遺跡では2度にわたり暗文土師器を入手した可能性が考えられる。暗文土師器は畿内で成立し、その影響を受けて地方に広まった土器で、畿内勢力と関係をもつようになった人々が入手した可能性が高い。本遺跡は、畿内との関係を持った人々の集落であり、畿内の影響を受けて、本遺跡の性格が大きく変化した可能性が考えられる。

#### (5) 遺跡の性格について

遺跡は、川沿いに形成された細長い水田地帯の南端に位置し、水田地帯の一部が見える丘陵尾根部にあり、北側の水田地帯を意識して造られたものと思われる。今回の調査で、竪穴住居跡と掘立柱建物跡を中心とする遺構を検出した。ただ、東側調査区外に平坦部が続き、遺跡は更に東へ広がっているため、遺跡の全体像は不明である。本遺跡は、出土遺物から6世紀第4四半期から7世紀中頃の遺跡と推定される。

出土遺物から掘立柱建物跡よりも竪穴住居跡の方が若干古い様相を呈している。竪穴住居跡から7世紀中頃の土器が出土していない点から、竪穴住居と掘立柱建物が同時に存在した可能性は低いと思われる。このため、当初は南部を中心とする竪穴住居に住んでいたが、7世紀のある段階で、北側に掘立柱建物を建てて転居した可能性が考えられる。その際、竪穴住居跡と推定できるSX3を壊して掘立柱建物を建てたものと思われる。

掘立柱建物跡は、建物方位がほぼ真北を示すように計画的に配置しており、特にSB5・6は同一の平坦面を造成し、溝で区画している。SB7は南北棟総柱建物であることから、倉庫であると考えられる。計画的な建物配置から見て、本遺跡は一般的な集落ではないと考える。本遺跡の遺構配置は、三次郡衙に比定されている下本谷遺跡<sup>(9)</sup>(三次市西酒屋町)のような遺構配置ではなく、広島県内の例では大宮遺跡<sup>(10)</sup>(福山市神辺町)や寺之下遺跡<sup>(11)</sup>(安芸高田市向原町)に近い。大宮遺跡は6世紀中頃から7世紀中頃の、寺之下遺跡は7世紀後半から8世紀の豪族居館跡と推定されている。また、掘立柱建物跡周辺から暗文土師器や多量の土師器甕・甗が出土しているが、硯・墨書土器・木簡などの官衙的な遺物は出土していない。遺構配置の特徴や遺物の出土状況から考えれば、本遺跡は現段階では有力者層の居宅とするのが妥当であろう。

なお、本遺跡の掘立柱建物跡周辺出土遺物は、この地域でのこれまでの須恵器(特に、坏H)の編年観によれば、7世紀前半～中頃とされるものが中心であり、明確に7世紀後半といえる遺物は出土していない。ただ、SX4出土の暗文土師器椀が飛鳥ⅢないしⅣ段階であれば、広島県

における7世紀代といわれている須恵器についてその年代を見直す必要があるかもしれない<sup>(12)</sup>。掘立柱建物が建てられた時期は、7世紀後半まで下る可能性も残されている。

また、この遺跡が官衙関連遺跡である可能性もある。7世紀代では有力者層（豪族）居宅と官衙関連遺跡は区別することは困難であり、機能が未分化あるいは重複している場合が多いとの考え<sup>(13)</sup>もあり、今後の検討課題になっている。

広島県内でも8世紀以降、計画的な配置の掘立柱建物跡が増加する。本遺跡は県内における計画的配置の掘立柱建物跡の例としては、早い時期の遺構といえる。いずれにせよ、この地域では、類例を見ない様相であり、類例の増加を期待したい。

## 註

- (1) 中村浩『和泉陶器窯の研究－須恵器生産の基礎的考察－』柏書房 1981年
- (2) 田辺昭三編『陶器古墳址群Ⅰ』平安学園考古学クラブ 1966年
- (3) 向田裕始『芸備地方における須恵器生産（1）－古墳時代を中心として－』『芸備古墳文化論考』芸備友の会 1985年
- (4) 岩本正二「三次市 向江田中山遺跡の調査」『広島県文化財ニュース』第192号 広島県文化財協会 2007年
- (5) 独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所『古代豪族居宅の構造と機能』2007年
- (6) 安間拓巳「広島県出土の暗文土師器」『芸備』第30集 芸備友の会 2002年  
安間拓巳「暗文土師器出土遺跡の研究－安芸・芸備地方を中心として－」『内海文化研究紀要』第30号 広島大学大学院文学研究科内海文化研究施設 2002年
- (7) 関広尚世「都のかおりと土師器－安芸地域における畿内産土師器の受容について－」『文化財論究』第2集 財団法人東広島市教育文化振興事業団文化財センター 2002年
- (8) 奈良国立文化財研究所「飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅱ」1978年
- (9) 下本谷遺跡発掘調査団「下本谷遺跡－推定備後国三次郡衙跡の発掘調査報告－」1975年  
広島県教育委員会「下本谷遺跡第1～4次発掘調査概報」1980～1983年  
広島県立埋蔵文化財センター「下本谷遺跡第5・6次発掘調査概報」1984・1985年
- (10) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「大宮遺跡発掘調査報告書 兼代地区Ⅰ」1985年  
財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「大宮遺跡発掘調査報告書 兼代地区Ⅱ」1986年
- (11) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「寺之下遺跡」1998年  
中村尚「郡衙所在地についての一考察」『研究輯録Ⅳ』財団法人広島県埋蔵文化財調査センター 1998年  
向原町教育委員会「寺之下遺跡」1999年
- (12) 陶器編年の暦年代比定については、地域によって様相が異なるのではないかと考えがある。特に、須恵器杯Hについては、流動的である。
- (13) 註（5）と同じ。

a SB1~4 竪穴住居跡  
全景 (西から)



b SB1 完掘全景  
(西から)



c SB1 完掘全景  
(北から)





a SB1カマド跡  
(西から)



b SB1中央部跡  
(東から)



c SB2土層断面  
(東から)

a SB 2 完掘全景  
(東から)



b SB 3 土層断面  
(南から)

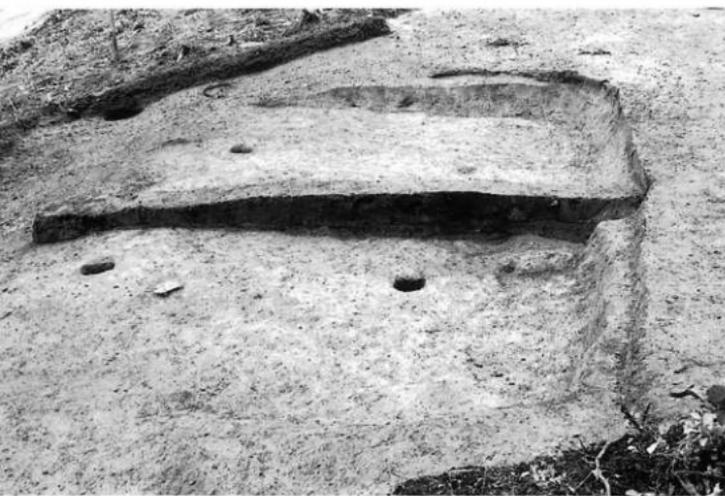


c SB 3 完掘全景  
(南から)





a SB3完掘全景  
(西から)



b SB4土層断面  
(南東から)



c SB4完掘全景  
(西から)

a SB4カマド跡  
(南から)



b SB5~8掘立柱建物  
跡 (南から)

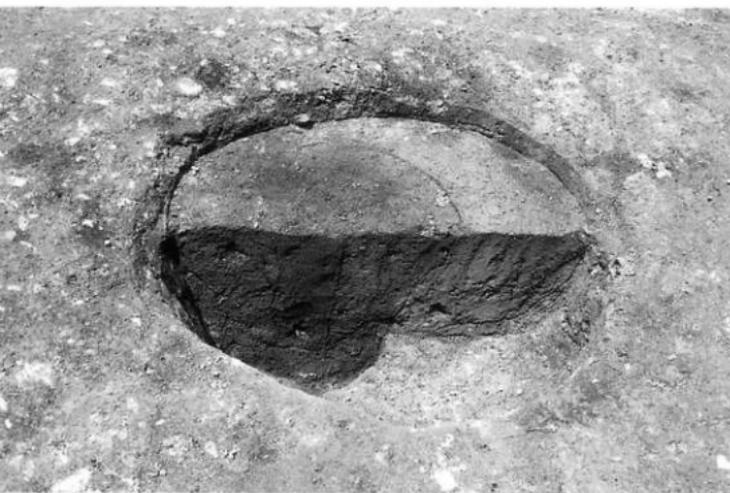


c SB5全景  
(南から)





a SB5全景  
(西から)



b SB5-P4土層断面  
(東から)



c SA1・SX3全景  
(南から)

a SA1-P1土層断面  
(東から)



b SB6・SA1全景  
(西から)



c SB6・SX4全景  
(南から)





a SX 4 遺物出土状況  
(南東から)



b SX 4 完掘全景  
(東から)



c SX 4 完掘全景  
(南から)

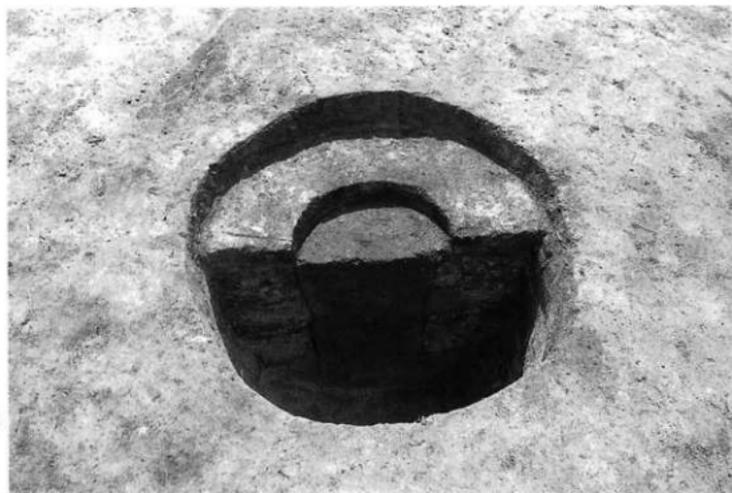
a SB7全景  
(南から)



b SB7全景  
(東から)



c SB7-P7土層断面  
(東から)





a SB 8 全景  
(南から)



b SB 8 全景  
(東から)



c SB 9 全景  
(北から)

a SB10全景  
(南から)



b SD6遺物出土状況  
(東から)



c SK2土層断面  
(東から)





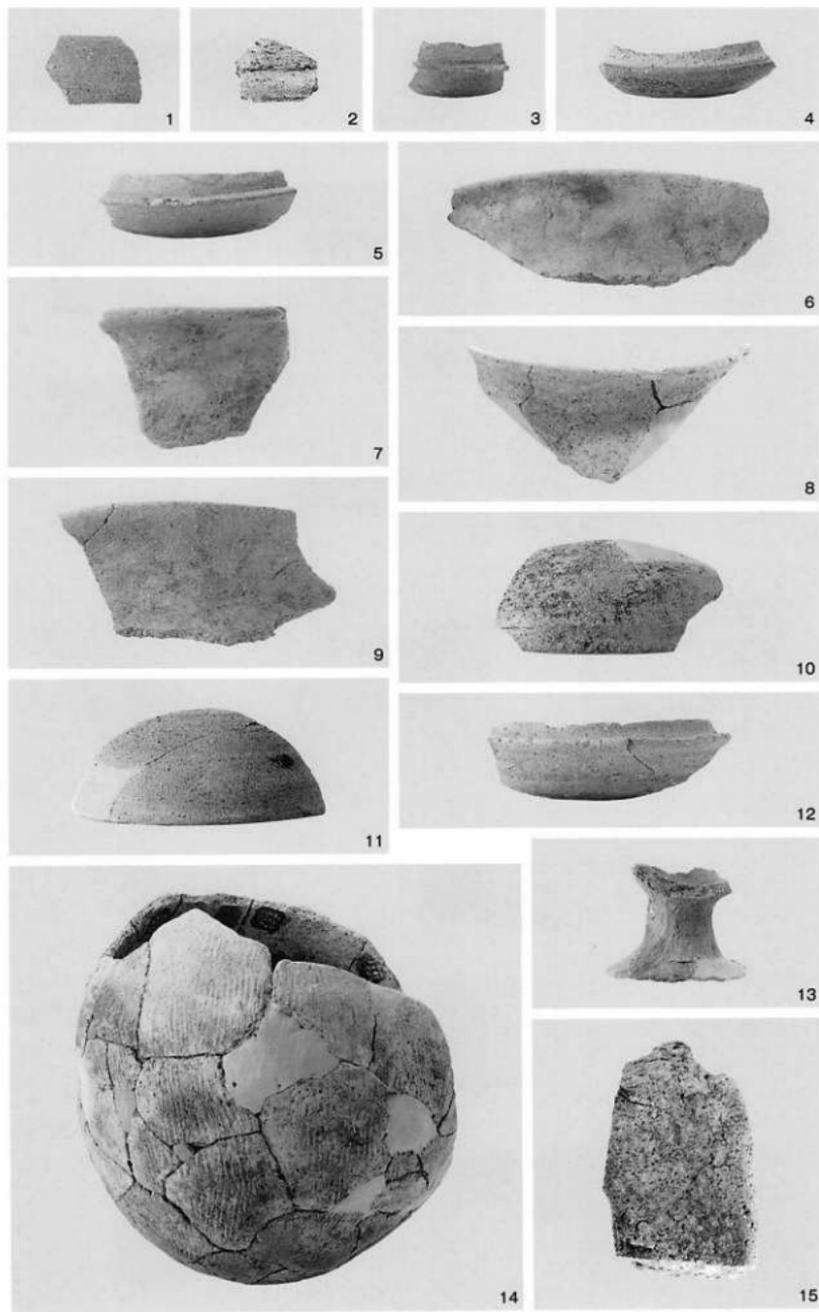
a SK3土層断面  
(南から)



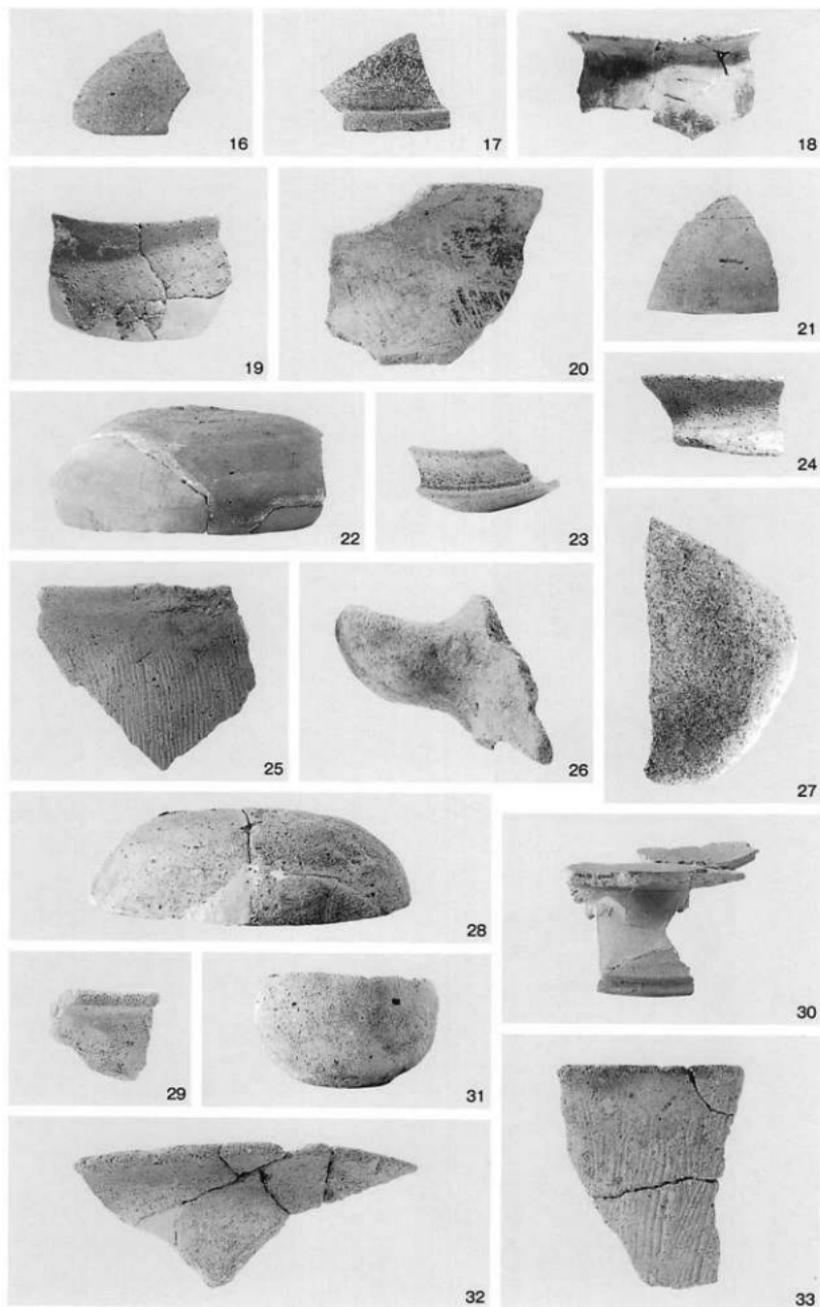
b SK7完掘全景  
(東から)



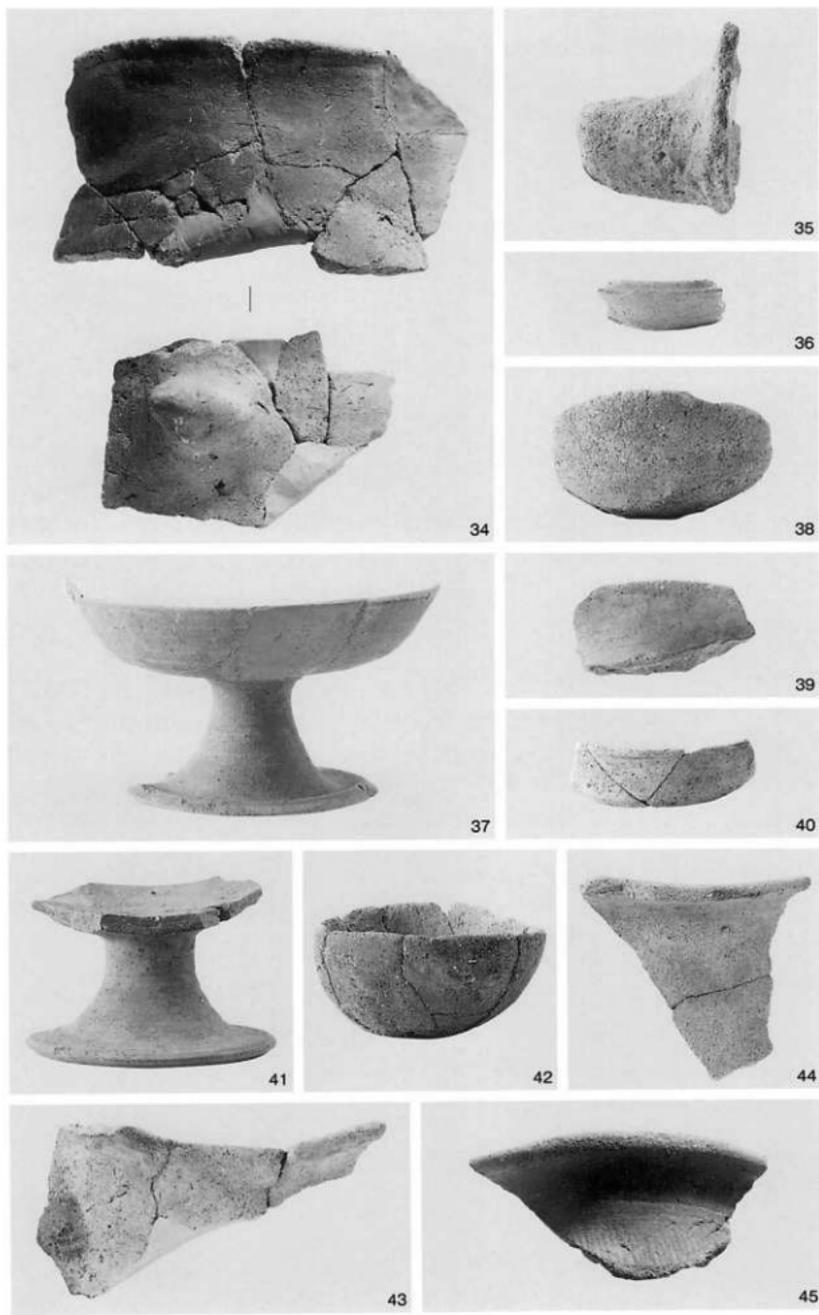
c SB1調査風景  
(南西から)



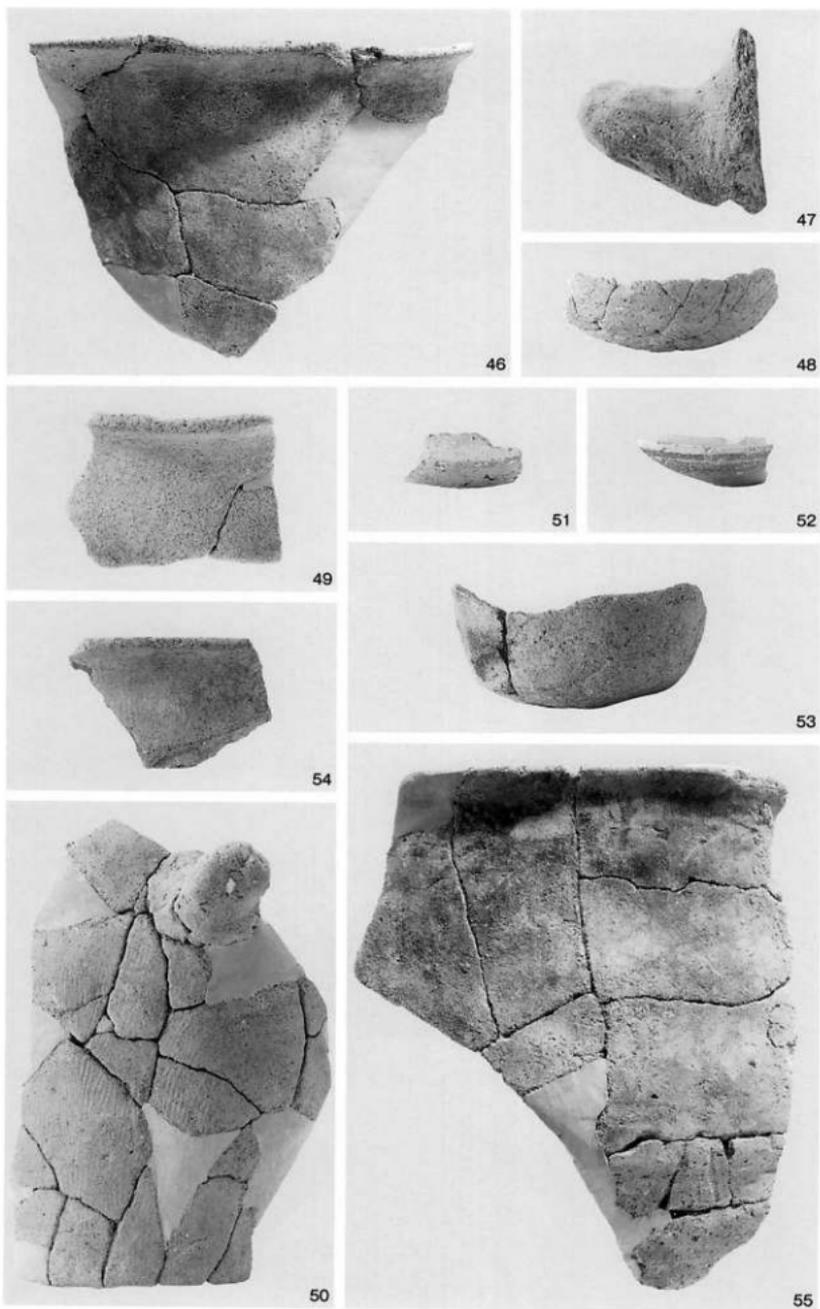
出土遺物 (1) (SB1・2)



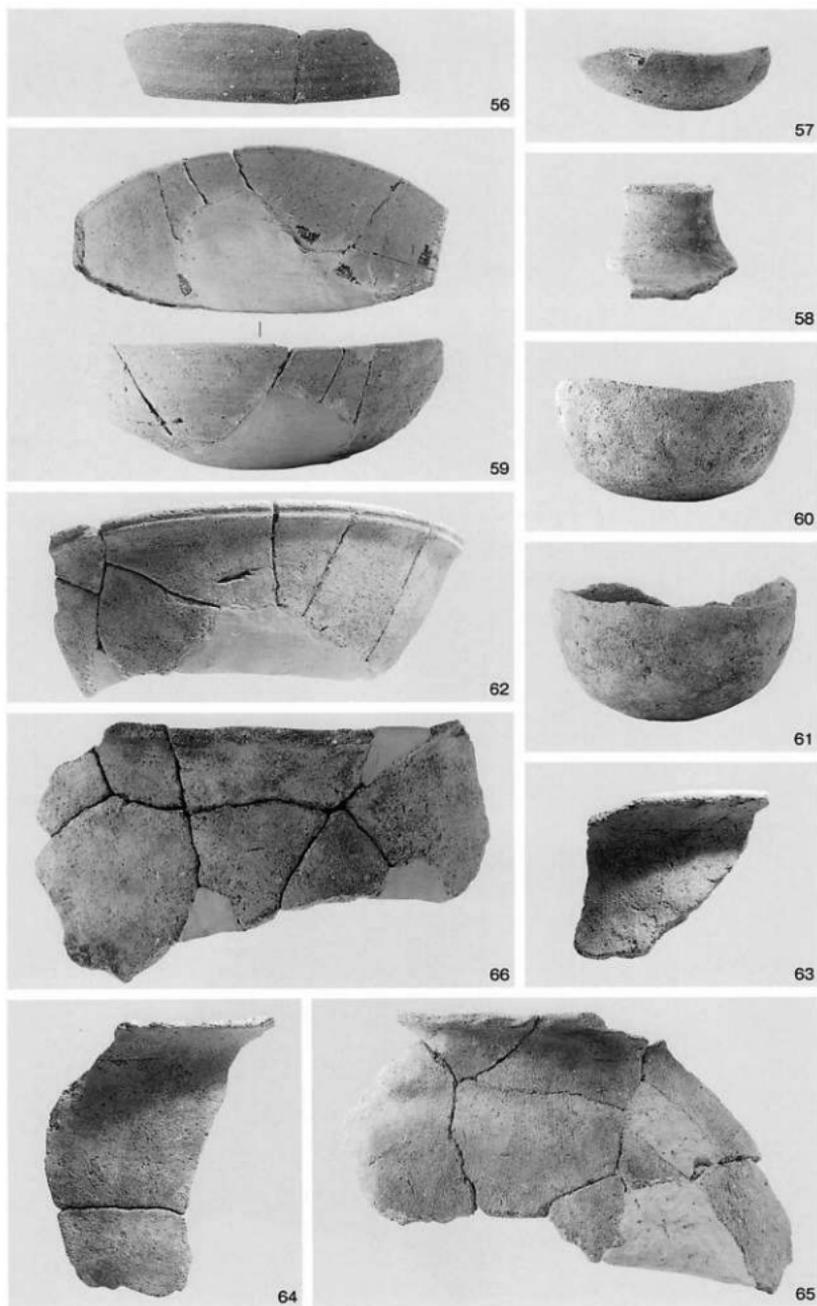
出土遺物 (2) (SB3・4, SD2・3)



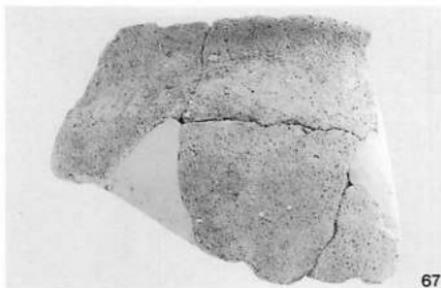
出土遺物 (3) (SD3・5・6)



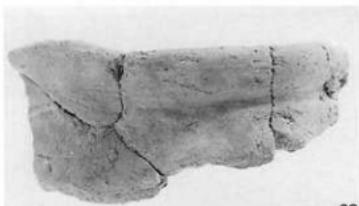
出土遺物 (4) (SD6・7, SX3)



出土遺物 (5) (S X 4)



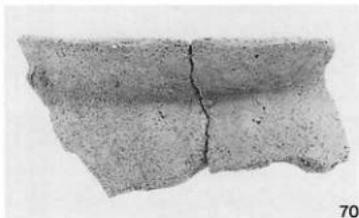
67



69



68



70



72



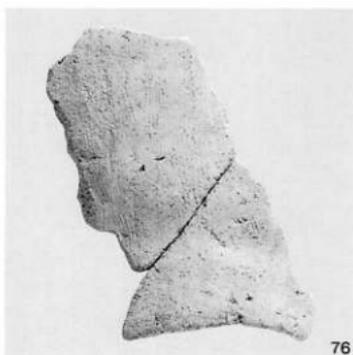
71



73



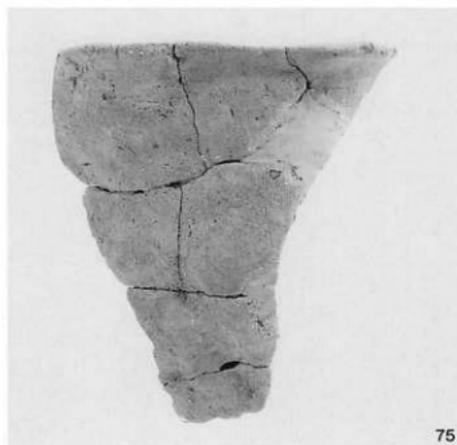
74



76



77



75



78



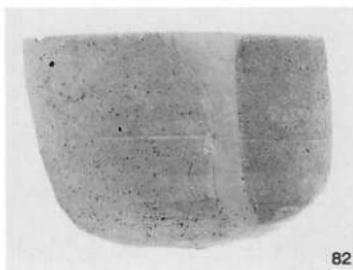
79



80



81



82

出土遺物 (7) (S X 4, 調査区内)

## 報告書抄録

ふりがな	ちゅうごくおうだんじどうしゃどうおのみちまつえせんけんせつにともなうまいぞうぶんか ざいはくつちようさほうこく きゅう
書名	中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(9)
副書名	向江田中山遺跡
巻次	9
シリーズ名	財団法人広島県教育事業団発掘調査報告書
シリーズ番号	第30集
編著者名	岩本 芳幸
編集機関	財団法人広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室
所在地	〒733-0036 広島県広島市西区観音新町四丁目8番49号 T E L.082-295-5751
発行年月日	西暦2010年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
向江田中山遺跡 <small>むかいえだなかやまのせき</small>	広島県 三次市向江田町 字中山 <small>ひろしまけん みよししむかいえだまち あざなかやま ななかやま</small>	34209	1784	34° 47' 26"	132° 54' 55"	20060417 ～ 20060623	1.450	中国横断自動車道尾道松江線建設事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
向江田中山遺跡	集落跡	古墳時代末 ～古代	竪穴住居跡4 掘立柱建物跡6 土坑7 溝11	須恵器 土師器 砥石	掘立柱建物跡を計画的に配置。少量であるが、暗文土師器や手づくね土器も出土。

要約	<p>丘陵尾根部に立地する6世紀末～7世紀の集落跡。小さい谷を挟んで、南側に竪穴住居跡4軒、中央から北側に掘立柱建物跡6棟が建てられている。ほとんどの掘立柱建物跡が主軸方向を揃え、計画的に配置されている。遺跡は東側の調査区外に広がっている。遺物は炊飯具である土師器壺・甔が多く、少量であるが暗文土師器や手づくね土器も出土している。本遺跡は、一般的な集落ではなく、村の有力者が居住し、官衙的要素をもつ集落と推定される。</p>
----	--

財団法人広島県教育事業団発掘調査報告巻第30集  
中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告(9)  
向江田中山遺跡

発行日 平成22(2010)年3月31日

編集 財団法人 広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室  
〒733-0036 広島市西区観音新町四丁目8番49号  
TEL (082) 295-5751 FAX (082) 291-3951

発行 財団法人 広島県教育事業団

印刷所 大村印刷株式会社